

市道垣生 109 号線外 1 路線道路改良工事（その 2）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

東垣生八反地遺跡

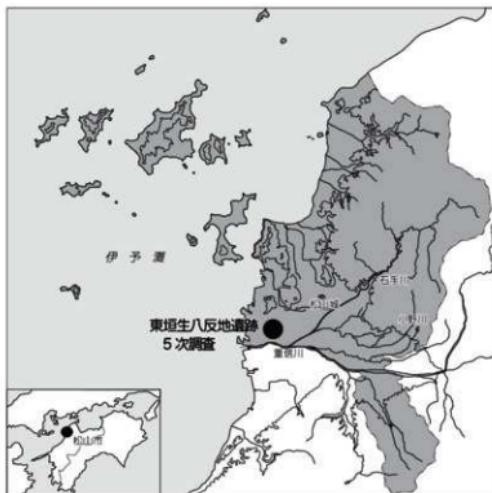
- 5 次調査 -

2020

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

市道垣生 109 号線外 1 路線道路改良工事（その 2）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

ひがし は ぶ は つ た ん じ
東垣生八反地遺跡
－ 5 次調査 –



2020

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

序　言

本書は松山市の委託を受け、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団が松山市道垣生 109 号線外 1 路線道路改良工事（その 2）に伴い、令和元年 7 月から 9 月にかけて実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書です。

東垣生八反地遺跡 5 次調査は松山平野西部、松山市東垣生地区に所在しており、同地区を含む周辺地域では近年の調査により弥生時代から中世までの集落や生産に関連する遺跡の存在が明らかになってきました。今回の調査では、鎌倉時代から室町時代の水田址を発見しました。水田址からは人間や牛の足跡のほか鋤址などが見つかり、水田耕作の状況や水田域の広がりなどを解明するうえで重要な資料を得ることができました。また、中世の堆積層からは土師器や須恵器、瓦器などの食器類のほかに木製の箸が出土しました。これらは、当時の食文化が知れる貴重な手がかりとなるものです。

このような成果を得られましたのも、埋蔵文化財に対する関係各位のご理解とご協力の賜物であり、厚くお礼申し上げます。つきましては、本書が埋蔵文化財行政の一助となり、普及・啓発や調査・研究にご活用いただければ幸いに存じます。

令和 2 年 1 月 31 日

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

例　言

1. 本書は公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センターが、令和元年7月から9月にかけて実施した松山市東垣生町における市道垣生109号線外1路線道路改良工事（その2）に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめた調査報告書である。
2. 遺構は、呼称名を略号化して記述した。
溝：SD、柱穴：SP
3. 本書で使用した標高値は海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした方眼北で世界測地系に準拠した。
4. 本書で報告した遺構埋土及び土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』（2006）に準拠した。
5. 本書掲載の遺構図や実測図の縮分は、縮分値をスケール下に記した。
6. 報告書作成に伴う遺物の復元・実測・製図及び遺構の製図は、調査担当者である水本 完児の指導のもと、保島 秀幸、松本 美代子、和泉 順子、山下 満佐子、山之内 聖子、三好 友香理、二宮 八咲が行った。
7. 本書掲載の遺構写真は水本が撮影し、遺物写真の撮影は大西 朋子が行った。なお、写真団版の作成は水本が担当した。
8. 発掘調査における国土座標軸測量は、国際航業株式会社に業務を委託した。
9. 本書の執筆は水本が担当し、浄書は平岡 直美が行った。
10. 本書で作成した図面・記録類及び出土品は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
11. 報告書抄録は、卷末に掲載している。

本文目次

第 1 章 はじめに.....	1
第 1 節 調査に至る経緯.....	1
第 2 節 調査の経緯.....	3
第 3 節 調査・刊行組織.....	5
第 2 章 遺跡の立地と歴史的環境.....	6
第 1 節 遺跡の立地.....	6
第 2 節 歴史的環境.....	6
第 3 章 調査の概要.....	10
第 1 節 層位.....	10
第 2 節 遺構と遺物.....	14
第 3 節 小結.....	31
第 4 章 調査の成果と課題.....	39

挿図目次

第 1 章 はじめに	
第 1 図 調査地及び周辺遺跡分布図（縮尺 1：5,000）.....	2
第 2 図 調査位置図（縮尺 1：2,000）.....	3
第 2 章 遺跡の立地と歴史的環境	
第 3 図 松山平野の地形分布図（縮尺 1：200,000）.....	6
第 4 図 周辺遺跡分布図（縮尺 1：40,000）.....	8
第 3 章 調査の概要	
第 5 図 北壁・東壁土層図（縮尺 1：60）.....	12
第 6 図 西壁土層図（縮尺 1：60）.....	13
第 7 図 水田 1 検出状況図（縮尺 1：80）.....	15
第 8 図 水田 1・第 VI 層出土遺物実測図（縮尺 1：3）.....	16
第 9 図 水田 2 検出状況図（縮尺 1：80）.....	17
第 10 図 水田 2 出土遺物実測図（縮尺 1：3）.....	18
第 11 図 溝・柱穴検出状況図（縮尺 1：80）.....	19
第 12 図 溝断面図（縮尺 1：20）.....	21
第 13 図 溝出土遺物実測図（縮尺 1：4、1：3）.....	22

第14図	柱穴測量図（縮尺1:20）	25
第15図	第Ⅷ層出土遺物実測図(1)（縮尺1:3）	27
第16図	第Ⅷ層出土遺物実測図(2)（縮尺1:3）	28
第17図	第Ⅷ層出土遺物実測図(3)（縮尺1:3）	29
第18図	第IX層出土遺物実測図（縮尺1:3）	30
第19図	第X層・地点不明出土遺物実測図（縮尺1:4、1:3）	31

表 目 次

第1章 はじめに

表1	東垣生八反地遺跡 調査一覧	5
表2	東垣生八反地遺跡 検出遺構一覧	

第3章 調査の概要

表3	溝一覧	33
表4	柱穴一覧	
表5	水田1出土遺物観察表（土製品）	
表6	水田1出土遺物観察表（石製品）	34
表7	第VI層出土遺物観察表（土製品）	
表8	水田2出土遺物観察表（土製品）	
表9	溝出土遺物観察表（土製品）	35
表10	第Ⅷ層出土遺物観察表（土製品）	
表11	第Ⅸ層出土遺物観察表（木製品）	37
表12	第IX層出土遺物観察表（土製品）	
表13	第IX層出土遺物観察表（石製品）	38
表14	第X層・地点不明出土遺物観察表（土製品）	

写真図版目次

写真1.	調査地周辺の上空写真（南東より） 〔平成28年度撮影〕	図版7	1. 溝・柱穴完掘状況②（東より） 2. 溝・柱穴完掘状況③（北より）
図版1	1. 調査前全景（北西より） 2. 調査地全景（南より）	図版8	1. SP3完掘状況（西より） 2. 作業風景（北西より）
図版2	1. 水田1検出状況（南より） 2. 水田1足跡検出状況（南東より）	図版9	1. 出土遺物（水田1:2、第VI層:3、 水田2:7~9・14・17~19、SD4: 22・23、SD8:26）
図版3	1. 水田1足跡完掘状況①（南より） 2. 水田1足跡完掘状況②（北東より）	図版10	1. 第Ⅷ層出土遺物①
図版4	1. 水田2検出状況（南より） 2. 水田2足跡完掘状況①（南より）	図版11	1. 第Ⅷ層出土遺物②
図版5	1. 水田2足跡完掘状況②（東より） 2. 溝・柱穴検出状況①（北より）	図版12	1. 出土遺物（第IX層:83~85・87、 91・93・94、第X層:95、地点不明: 98・99）
図版6	1. 溝・柱穴検出状況②（東より） 2. 溝・柱穴完掘状況①（北より）		

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

2018（平成30）年7月31日、松山市都市整備部道路建設課（以下、申請者という。）より、松山市東垣生町818番1、818番2地内（以下、申請地といふ。）における市道垣生109号線外1路線道路改良工事（その2）に伴う埋蔵文化財の確認申込書が松山市教育委員会事務局文化財課（以下、文化財課といふ。）に提出された。

申請地周辺では、平成26年度から28年度にかけて松山外環状道路（空港線）整備に伴う発掘調査が実施されて、弥生時代から中世に至る遺跡が発見されている（第1図）。とりわけ、申請地西方には東垣生八反地遺跡1・3次調査地があり、鎌倉時代から室町時代の水田址や畠址のほかに建物址や井戸址、土壙墓などが検出されている。また、申請地東方には余戸柳井田遺跡3・6次調査地があり、平安時代から鎌倉時代の建物址や溝のほかに水田址が発見されている。このほかには、申請地の南東に所在する余戸中ノ孝遺跡3次調査地からは弥生時代や古墳時代の堅穴建物が検出され、余戸中ノ孝遺跡1次調査では愛媛県内初となる溝を伴った鎌倉時代の土壙墓が発見されている。さらに、申請地北西には南吉田南代遺跡があり、弥生時代前期から古墳時代までの遺物を含む包含層が検出されている。とりわけ、松山平野内では出土例の少ない弥生時代終末期から古墳時代初頭に時期比定される土器が本層中から大量に出土している。これらのことから、文化財課は遺跡の取り扱いについて課内にて協議を行い、開発によって失われる遺跡に対して発掘調査が必要と判断した。

2019（令和元）年5月13日、申請者と松山市都市整備部空港港湾課（以下、契約者といふ。）、公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センター（以下、市埋文センターといふ。）の三者は発掘調査について協議を行い、屋外調査と調査成果をまとめた調査報告書作成作業とを併せた委託契約を結ぶことになった。委託契約は契約者と市埋文センターとの間で、『市道垣生109号線外1路線道路改良工事（その2）に伴う埋蔵文化財発掘調査及び報告書作成業務』という件名にて、2019（令和元）年6月10日付けで締結した。発掘調査は文化財課の協力のもと、市埋文センターが主体となり、2019（令和元）年7月16日より開始した。

調査名：東垣生八反地遺跡5次調査

所在地：松山市東垣生町818番1、818番2

契約期間：2019（令和元）年6月10日（月）～2020（令和2）年2月28日（金）

調査期間：2019（令和元）年7月16日（火）～2019（令和元）年9月13日（金）

調査面積：124.22m²

契約者：松山市都市整備部空港港湾課

調査主体：公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センター

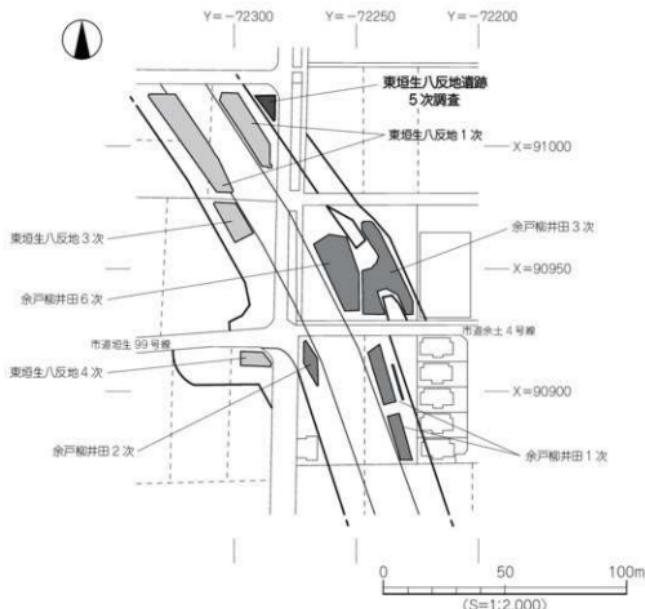


第1図 調査地及び周辺遺跡分布図

第2節 調査の経緯

東垣生八反地遺跡としては、公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センターと市埋文センターによって、これまでに4度の発掘調査（1次～4次調査）が実施されている（表1・2）。遺跡からは、主に鎌倉時代の集落跡（掘立柱建物・溝・土坑・土壙墓・井戸）や鎌倉時代から室町時代の水田址などが確認されている。これらの調査成果をふまえ、令和元年7月16日より発掘調査に着手した。

本調査地の現況は雑種地であり、調査地の周囲は車道や歩道が整備されていた。調査面積が狭小であることから、調査事務所の設置や駐車場用地は、調査地の西方にある松山市の所有地（松山市東垣生町848番1、848番2）を借用した。発掘調査は7月16日より重機を使用して表土層を除去し、廃土はダンプカーを使用して借用地まで運搬した。なお、発掘調査と併行して写真や図面、遺物等の整理作業を行い、調査終了後は調査報告書の作成作業を行った。以下、調査及び整理作業の工程を略記する。



第2図 調査地位置図

【発掘調査】

発掘調査は令和元年7月16日より開始した。ここでは、調査の経緯を略記する。

7月16日（火）：借用地内に仮設ハウスの設置と発掘機材の搬入を行い、同日、発掘調査対象地内に安全対策用のガードフェンスを設置する。

7月17日（水）：重機（バックホー0.1m³）と2tダンプカーを使用して、表土の掘削と搬出・運搬を行う。現地表面下1mの地点まで掘削し、水田址を検出する（水田1と呼称）。

7月24日（水）：平面精査を行い、足跡や根株痕を多数検出する。遺構検出状況写真の撮影後、これらの遺構の掘り下げを開始する（7月30日に終了）。

7月25日（木）：国際航業株式会社松山営業所に委託し、調査地内に4級基準点を打設する。

7月31日（水）：調査壁の土層図と遺構測量図を作成し、水田1の調査を終了する。

8月1日（木）：検出した遺構の完掘状況写真を撮影する。

8月2日（金）：重機を使用して水田1土壤の掘り下げを行い、新たに水田址を検出する（水田2と呼称）。

8月5日（月）：平面精査を行い、足跡や根株痕を多数検出する。その後、これらの遺構の掘り下げを開始する。

8月7日（水）：遺構の掘り下げが終了し、検出状況写真を撮影する。

8月8日（木）：検出した遺構は写真測量を行い、その後、重機を使用して水田2土壤や水田下面に堆積する土層の掘り下げを開始する。

8月13日（火）：台風の影響により、調査地や借用地の安全対策を強化する。

8月20日（火）：本日より、調査を再開する。平面精査を行い、溝や柱穴を検出する。

8月21日（水）：検出した遺構の掘り下げと測量作業を進め、併行して調査壁の土層図を作成。調査中は湧水が激しく、常時、排水作業を行った。

8月27日（火）：調査壁面にトレーナーを掘削し、検出面下の土層堆積状況を確認するが、湧水の影響により、調査壁が部分的に崩落する。その結果、検出面以下の状況は平面調査が困難であると判断し、平面掘削は中止し、土層図による記録作業に留めた。

9月4日（水）：遺構の掘り下げが終了し、完掘状況写真を撮影する。

9月6日（金）：文化財課による現場検査が行われ、調査の状況と結果を報告する。

9月9日（月）：本日より、重機を使用して調査地の埋め戻し作業を開始する。併行して、仮設ハウスの撤去や発掘機材の搬出を行い、9月13日（金）屋外調査を終了する。

【整理作業】

発掘調査と併行して、出土遺物の洗浄や注記、復元作業を行い、8月からは水田1や包含層から出土した遺物の選別作業をした後、実測作業に取り掛かった。9月には、水田2及び包含層から出土した遺物の整理と共に実測作業を開始した。発掘調査終了後は、調査で作成した図面や記録写真の整理と、報告書掲載用の挿図原図の作成を行った。10月からは実測図や挿図のデジタルトレス作業に着手し、10月末に作業を終了した。11月には報告書掲載用の遺物写真を撮影し、写真図版の作成と報告書編集作業を進め、11月末には報告書原稿の作成を終了した。

表1 東垣生八反地遺跡 調査一覧

調査名	調査場所	調査面積 (m ²)	調査期間	担当
東垣生八反地（1次）	松山市東垣生町 818番6～10、899番3・4、900番3・4の各一部、899番5	874	平成28年3月1日～同年5月31日	市埋文
東垣生八反地（2次）	松山市東垣生町	1,278	平成28年4月5日～同年6月30日	県埋文
東垣生八反地（3次）	松山市東垣生町 905番6、817番8の一部	236	平成28年6月1日～同年7月25日	市埋文
東垣生八反地（4次）	松山市東垣生町 816番4	177	平成28年10月24日～同年11月29日	市埋文
東垣生八反地（5次）	松山市東垣生町 818番1、818番2	124.22	令和元年7月16日～同年9月13日	市埋文

表2 東垣生八反地遺跡 掘出遺構一覧

調査名	鎌倉時代	室町時代
東垣生八反地（1次）	掘立柱建物：2棟、溝：21条、土坑：12基、土壤墓：1基、井戸址：2基、水田址	水田址
東垣生八反地（2次）	土坑：13基、井戸址：1基、溝：30条、柱穴：212基	水田址
東垣生八反地（3次）	溝：1条	土坑：1基、水田址
東垣生八反地（4次）	溝：5条、土坑：2基、井戸址：2基	水田址
東垣生八反地（5次）	水田址、溝：16条、柱穴：6基	水田址

第3節 調査・刊行組織

〔令和元年度〕

公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團

事務局

理事長 本田 元広

局長 片山 雅央

次長 大野 昌孝

施設管理部

部長 片上 俊哉

埋蔵文化財センター

所長兼考古館長 梅木 謙一

主任 水本 完児（調査・整理担当）

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

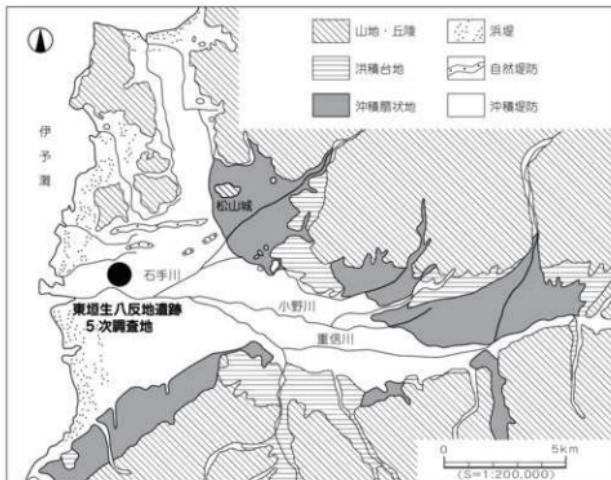
第1節 遺跡の立地

調査地が所在する松山平野は、愛媛県の中央部付近に位置し、西は伊予灘や斎灘に面し、南東部は石鎚山系、北部を高縄山麓に挟まれた沖積平野である。高縄山系に源を発する石手川は平野内を北東から南西方向に流れ、扇状地を形成した後に重信川と合流する。重信川は中央構造線に沿って流れ、河口付近では小野川や石手川と合流した後、伊予灘に注ぐ。地質学的には、高縄山系は中生代の領家帯貫入岩類である松山型花崗岩によって構成される花崗岩地帯である。

東垣生八反地遺跡5次調査は松山平野西部、一級河川である重信川の北岸付近に位置する。調査地の絶対位置は北緯 $33^{\circ}49'5''$ 、東経 $132^{\circ}43'8''$ の交差する付近で、現況の標高は4.7m前後である（第3図）。

第2節 歴史的環境

調査地周辺は重信川水系や小野川水系と考えられる旧河道による氾濫原の可能性があり、近年まで遺跡の存在は知られていない地域であった。ところが、平成25年度から実施した松山外環状道路整



第3図 松山平野の地形分布図

備に伴う発掘調査により、弥生時代から中世に至る遺跡の存在が明らかになった。ここでは、松山平野西部域における遺跡の様相について、外環状道路関連調査を中心に概観する（第4図）。

1. 繩文時代

明確な遺構は検出されていないが、古照遺跡で検出された井堰を覆う砂礫層からは後期を中心前期末から晩期の土器片が出土している。このほか、松山総合公園が所在する大峰ヶ台丘陵東麓の朝美澤遺跡2次調査からは包含層中より後期の土器片が出土している。

2. 弥生時代

松山市考古館の西方にある弁天山丘陵東麓、斎院鳥山遺跡からは前期末から中期初頭の環濠が検出されている。斎院鳥山遺跡の北方にある宮前川遺跡では、弥生時代末の堅穴建物が検出され、弥生末から古墳時代初頭の土器も大量に出土している。宮前川遺跡の西方、津田中学校構内にある津田鳥越遺跡からは焼失住居を含む複数の住居址が検出され、住居内からは土鍤や石鍤などの漁労具をはじめ、後期後半から庄内段階の土器が多量に出土している。また、余土中学校構内遺跡では前期末の土坑が数基発見されている。このほか、調査地が所在する余戸・東垣生・南吉田地区では、南吉田南代遺跡検出の包含層中より、前期末から後期の土器が多数出土している。余戸払川遺跡からは前期末から後期の建物や溝、土坑、方形周溝状遺構などが検出され、継続的な集落經營が行われていたことが確認されている。また、余戸中ノ孝遺跡3・6次調査では、弥生時代末から古墳時代初頭の堅穴建物が複数検出されている。

3. 古墳時代

調査地の東方にある平野部からは集落遺跡が数多く発見され、御産所・岩子山・弁天山などの丘陵部には中期から後期の古墳が存在している。

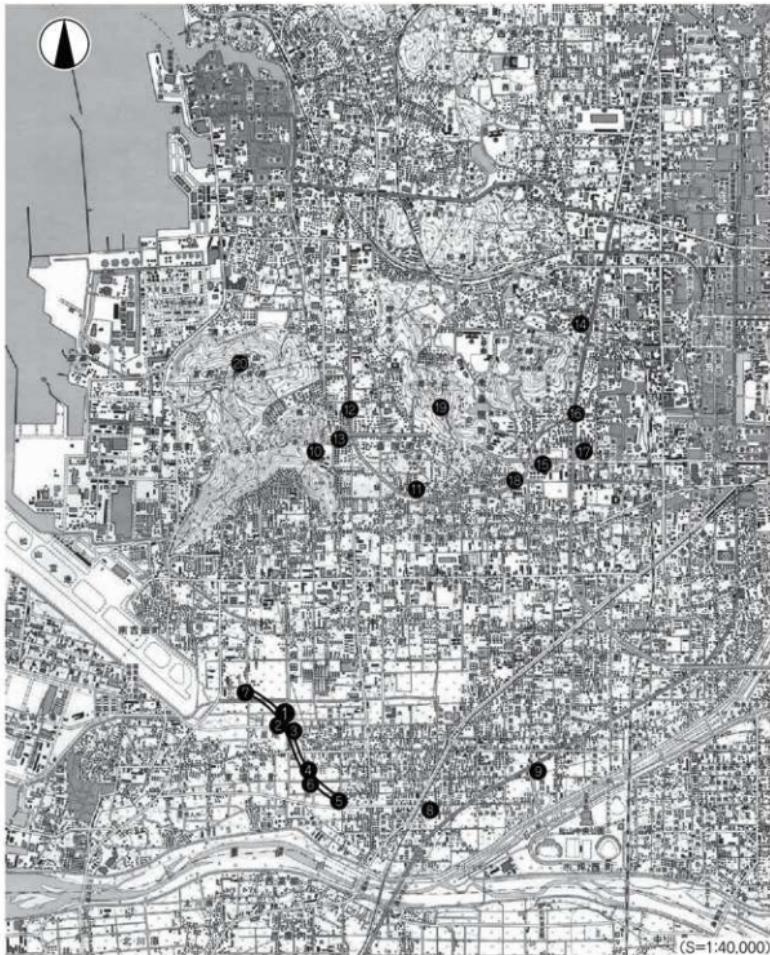
平野部では古照遺跡があり、前期の灌漑施設である堰が確認されている。また、宮前川遺跡からは初頭から前期の堅穴建物群や堰堤状遺構が検出されている。なお、宮前川周辺の遺跡からは、弥生時代末から古墳時代初頭の遺物が大量に出土し、その中には畿内地方や讃岐地方、山陰地方の影響を受けた外來系土器が含まれており、他地域との交流が知れる貴重な資料となっている。

余戸地区では、余戸中ノ孝遺跡5次調査検出の堅穴建物からは中期前半に時期比定される市場系須恵器が数多く出土している。また、前述の余戸中ノ孝遺跡3・6次調査からは前期から後期の堅穴建物や掘立柱建物、溝、土坑が検出されている。

一方、丘陵上では箱式石棺を主体部とする弁天山古墳があり、石棺内からは青銅鏡2面が出土している。また、岩子山古墳では人物埴輪や馬形埴輪などが出土している。

4. 古代

松山環状線内親和園前遺跡では、平安時代前半に使用されたと考えられる瓦が大量に出土し、「朝美澤廐寺」と呼称して報告されている。余戸地区では余戸柳井田遺跡3次調査において溝が検出され、溝からは平安時代後期の土器や植物を形どった板状の木製品などが出土している。



- | | | |
|-----------------|-----------------------|-------------------------|
| ① 東垣生八反地遺跡5次調査 | ② 東垣生八反地遺跡1-2-3-4次調査 | ③ 余戸柳井田遺跡1-2-3-4-5-6次調査 |
| ④ 余戸中ノ寺遺跡7次調査 | ⑤ 余戸中ノ寺遺跡1-2-3-5-6次調査 | ⑥ 余戸中ノ寺遺跡4次調査 |
| ⑦ 南吉田南代遺跡1-2次調査 | ⑧ 余戸弘川遺跡 | ⑨ 余土中学校構内遺跡 |
| ⑩ 津田中学校構内遺跡 | ⑪ 北斎院地内遺跡 | ⑩ 宮前川遺跡 |
| ⑪ 斎院鳥山遺跡 | ⑫ 胡美澤遺跡2次調査 | ⑪ 古照ゴラ遺跡 |
| ⑬ 松環古照遺跡 | ⑬ 古照ゴラ遺跡 | ⑫ 南斎院土居北遺跡 |
| ⑭ 岩子山古墳 | ⑭ 弁天山古墳 | |

第4図 周辺遺跡分布図

5. 中世

大峰ヶ台丘陵南麓にある大宝寺は大宝年間の創建で、本堂は鎌倉時代初期の建物で、昭和28年国宝に指定されている。周辺にある松環古照遺跡や南斎院土居北遺跡では、「方形館」を区画する溝が検出され、古照遺跡や古照ゴウラ遺跡からは13～14世紀代の建物址や溝、土坑が発見されている。また、北斎院地内遺跡では15～16世紀代の掘立柱建物や井戸、墓などが検出されている。

余戸・垣生地区では、余戸中ノ孝遺跡1次調査において愛媛県下では初例となる溝を伴った土壙墓が発見されている。また、余戸柳井田遺跡や東垣生八反地遺跡からは掘立柱建物や溝、土坑、井戸などが数多く検出され、余戸柳井田遺跡3次調査では建物柱穴内にて柱材の一部が検出されている。いずれも、鎌倉時代、13～14世紀代の遺構である。なお、同遺跡からは、3,000ヶを超える人や牛の足跡が残る水田址が検出され、概ね鎌倉時代から室町時代、14～15世紀代の水田址と考えられている。

【参考文献】

- 古照遺跡調査団 1974 『古照遺跡』松山市文化財調査報告書 IV
- 名本 二六雄 1975 『岩子山古墳』松山市文化財調査報告書 Ⅷ
- 森 光晴・大山 正風 1976 『古照遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書 第10集
- 西尾 幸則 1987 『宮前川遺跡』松山市文化財調査報告書 第18集
- 梅木 謙一 1992 『朝美澤遺跡・辻町遺跡』松山市文化財調査報告書 第29集
- 梅木 謙一 1992 『朝美澤遺跡 2次調査地』『松山市埋蔵文化財調査年報IV』
- 栗田 正芳 他 1993 『古照遺跡 - 第6次調査 -』松山市文化財調査報告書 第35集
- 岡田 敏彦 1993 『一般国道196号線松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書 I 松環古照遺跡』財團法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 埋蔵文化財発掘調査報告書 第41集
- 梅木 謙一 1994 『斎院の遺跡』松山市文化財調査報告書 第43集
- 栗田 正芳 他 1995 『古照遺跡 - 第10・11次調査 -』松山市文化財調査報告書 第47集
- 栗田 正芳 1996 『古照遺跡 - 第8・9次調査 -』松山市文化財調査報告書 第53集
- 梅木 謙一 2001 『斎院の遺跡II - 鳥越・津田中学校構内・北斎院地内 -』松山市文化財調査報告書 第80集
- 中野 良一 他 2004 『南斎院土居北遺跡・南江戸闘目遺跡(2次調査)』財團法人愛媛県埋蔵文化財調査センター埋蔵文化財発掘調査報告書 第113集
- 増田 晴美 2014 『余戸弘松遺跡』『愛比売 - 平成25(2013)年度年報 -』公益財團法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 河野 史知 2016 『余戸中学校構内遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報28』
- 三好 褒之 2018 『余戸中の孝遺跡3・6・6次調査』公益財團法人愛媛県埋蔵文化財センター 埋蔵文化財発掘調査報告書 第193集
- 高尾 和長 2019 『斎院鳥山遺跡3次調査・朝美辻遺跡3次調査』松山市文化財調査報告書 第195集
- 河野 史知・宮内 懇一 2019 『松山外環状道路(空港線)整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 余戸中ノ孝遺跡1・2・4・5次調査、余戸柳井田遺跡1・2・3・6次調査、東垣生八反地遺跡1・3・4次調査、南吉田南代遺跡1次調査』松山市文化財調査報告書 第196集

第3章 調査の概要

第1節 層位 (第5・6図)

調査地は、調査以前は雑種地であった。調査地の現況は、標高約4.6～4.7mである。調査で確認した土層は、以下の10層（第I～X層）である。このうち、第IV層と第VII層は水田土壤である。なお、第X層は調査壁面に設定したトレンチにより検出した土層である。

第I層－近現代の造成土（I①～⑥層）や水田耕作に伴う耕土（I⑦・⑧層）であり、8種類に分層される。本層は、地表下50～60cmまで開発が及んでいる。

I①層：オリーブ黒色土（7.5Y 3/2）

I②層：オリーブ灰色土（2.5GY 5/1）

I③層：暗オリーブ灰色土（2.5GY 4/1）

I④層：黒褐色土（10YR 3/2）に径3～5cm大の礫混入

I⑤層：黒褐色土（2.5Y 3/2）に径1～5cm大の礫混入

I⑥層：暗緑灰色土（10GY 4/1）

I⑦層：灰オリーブ色土（5Y 5/2）

I⑧層：灰オリーブ色土（7.5Y 5/2）

第II層－黄褐色土（10YR 5/6）で調査地ほぼ全域にみられ、層厚は2～10cmである。本層中からは、遺物の出土はない。

第III層－暗灰黄色土（2.5Y 5/2）で調査地全域にみられ、層厚は2～18cmである。本層中からは、遺物の出土はない。

第IV層－灰色土（10Y 6/1）で、水田土壤（水田1と呼称）である。調査地全域にあり、層厚は2～15cmである。本層上面からは、多数の足跡や根株痕を検出した。本層中からは、少量の土師器片と石器（砥石）が出土している。

第V層－褐灰色土（7.5YR 6/1）で調査地全域にみられ、層厚は3～20cmである。本層中からは、遺物の出土はない。

第VI層－褐灰色砂質土（7.5YR 6/1）で調査地全域にみられ、層厚は4～14cmである。本層中からは、鎌倉時代に時期比定される土師器や瓦器の小片が数点出土している。

第VII層－褐灰色土（10YR 6/1）で、水田土壤（水田2と呼称）である。調査地全域にみられ、層厚は2～20cmである。本層上面からは、多数の足跡や根株痕を検出した。なお、本層中からは鎌倉時代に時期比定される土師器や須恵器、瓦器の小片が少量出土している。

第VIII層－褐灰色土（10YR 5/1）で調査地全域にみられ、層厚は2～15cmである。本層中からは鎌倉時代に時期比定される土師器や須恵器、瓦器のほかに国産陶磁器（亀山焼）や輸入陶磁器（白磁・青磁）などの破片が数多く出土した（遺物収納箱2箱分）。このほか、本層中からは木製品やモモの種子9点が出土している。

第IX層－黄灰色土（2.5Y 5/1）で調査地全域にあり、層厚は2～10cmである。本層上面が、調査に

おける最終遺構検出面である。本層上面からは、数条の溝と柱穴を検出した。なお、本層中からは土師器や須恵器、瓦器の小破片が出土したほか、弥生時代の石器などが出土している。

第X層 - 黄灰色微砂や灰白色の砂と小礫から構成される土層で、4種類に分層される。本層は、調査地壁面に設定したトレンチにより確認したものであるが、検出状況から河川もしくは自然流路の一部と考えられる。本層中からは弥生土器（終末期）や土師器、須恵器の小破片が少量出土している。

X①層：黄灰色微砂（2.5Y 6/1）で調査地中央部を除く地域にみられ、層厚15cm以上である。

X②層：灰白色砂（7.5Y 8/1）で調査地中央部付近と北端とにみられ、層厚は10cm以上である。

X③層：灰白色砂（10Y 8/1）で調査地中央部と北側にみられ、層厚8cm以上である。本層中には小礫と浅黄橙色砂が混入している。

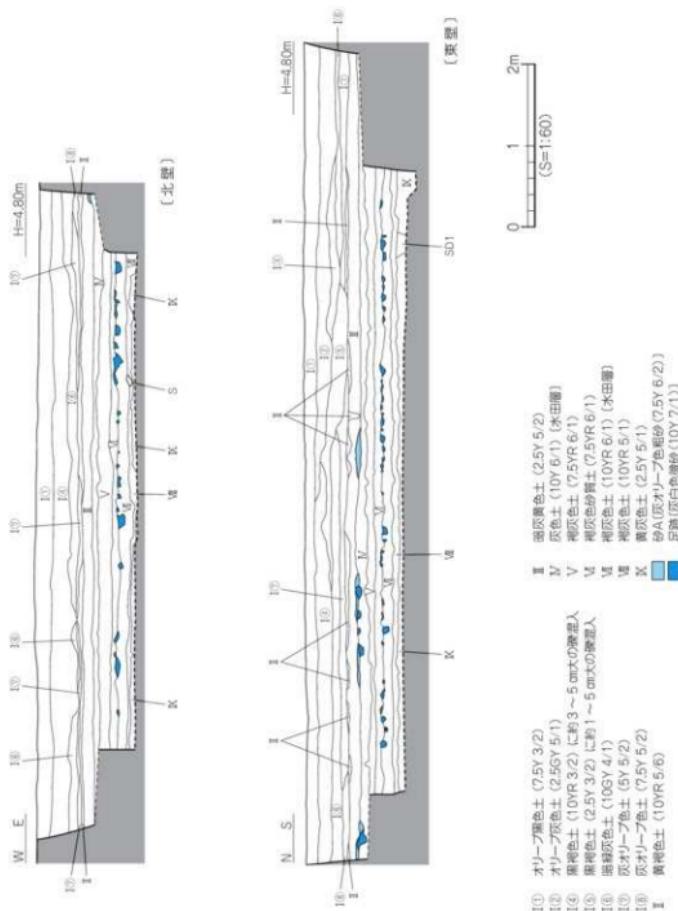
X④層：灰白色砂（N7/ ）で調査地北側にみられる。

上記の土層以外では、検出した水田1上面付近に砂が部分的に堆積しており、本稿では砂A〔灰オリーブ色粗砂（7.5Y 6/2）〕として土層表記している。なお、水田址から検出した足跡や根株痕は全て灰白色微砂（10Y 7/1）で埋没しており、土層図には「足跡」として掲載している。

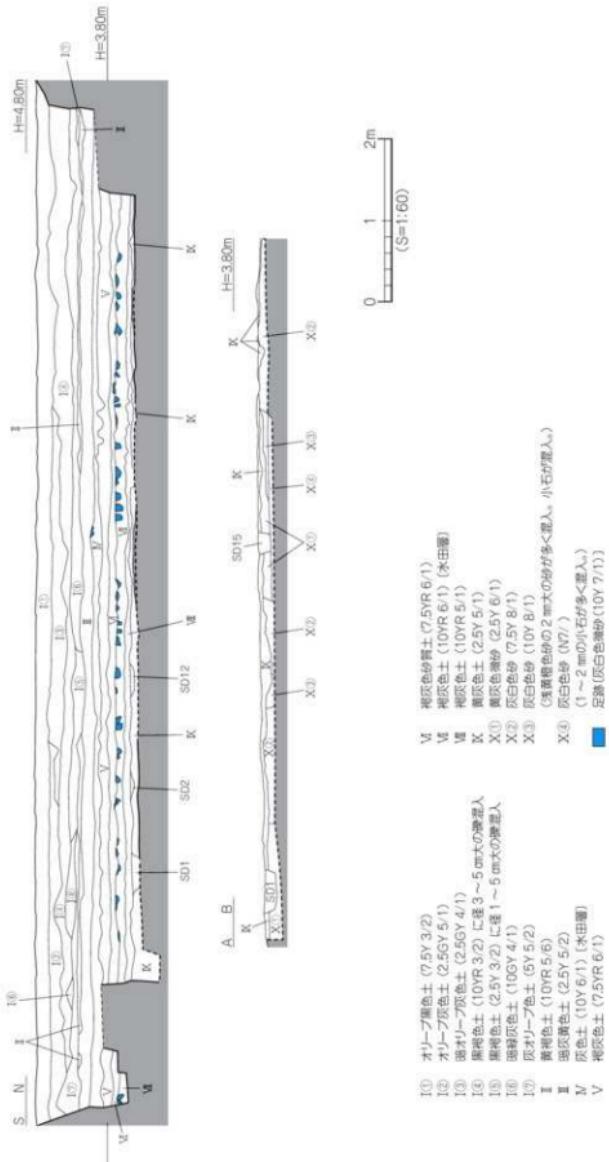
検出層位や出土遺物より、第VII層・IX層は鎌倉時代の堆積層と考えられる。なお、調査にあたり調査地内を2m四方のグリッドに分けた。グリッドは東から西へA・B・C・D・E、北から南へ1・2・3…6とし、A1・A2…E6区といったグリッド名を付した。グリッドは、検出した遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。



写真1. 調査地周辺の上空写真（南東より）〔平成28年度撮影〕



第5図 北壁・東壁土層図



第6図 西壁土層図

第2節 遺構と遺物

調査では水田址（2面）と溝16条、柱穴6基を検出した。遺物は弥生土器、土師器（古墳～中世）、須恵器（中世）、瓦器（中世）、国産陶磁器（亀山焼）、輸入陶磁器（白磁・青磁）のほか、石製品や木製品、種子が出土した。遺物の出土量は、遺物収納箱（44×60×14cm）約4箱分である。

1. 水田址

調査では、2面の水田址を検出した。水田址は水田1、水田2と呼称して調査を進めた。

水田1（第7図、図版2・3）

第Ⅲ層掘り下げ後に検出した水田址で、第Ⅳ層の灰色土（10Y 6/1）が水田土壤である。層厚は2～12cmであり、土壤内に鉄分やマンガン鉱を少量含んでいる。水田1上面の標高を測量すると、4m前後である。水田1からは、牛や人の足跡と根株痕を検出した。総数は、441ヶである。

牛の足跡は73ヶを確認でき、大きさは直径5～10cm、深さ1～5cmである。また、人の足跡のうち、確認可能な足跡の長さは10～20cm、深さは1～6cmである。これらは、全て灰白色微砂（10Y 7/1）で埋没している。検出状況から、水田1は洪水等の災害により埋没したものと推測される。その際、埋没した水田址は現況を留めず、新たな水田が構築されたものと思われる。その結果、畦畔や付帯施設等が遺存しなかったと考えられる。なお、牛の足跡は真北方向に直交または平行するように東から西、西から東へ進んでおり、少なくとも真北方向を指向する水田区画が存在したものと推測される。足跡や根株痕からは、遺物の出土はない。なお、水田土壤内からは少量の土師器片と砥石が出土した。また、水田1下面に堆積する第VI層中からは少量ではあるが遺物が出土している。ここでは、水田土壤及び第VI層から出土した遺物を掲載する。

① 水田層出土遺物（第8図、図版9）

土師器（1）

1は土師器壺の底部。小片で、器表面は摩滅が著しく調整は不明である。

石器（2）

2は携帯用の砥石。4面の砥面をもち、残存長5.8cm、幅5.9cm、厚さ4.1cmである。断面形態は方形状をなし、砥面には幅1mm、深さ1mm程度の線状痕が残る。使用石材は、石英粗面岩である。

② 第VI層出土遺物（第8図、図版9）

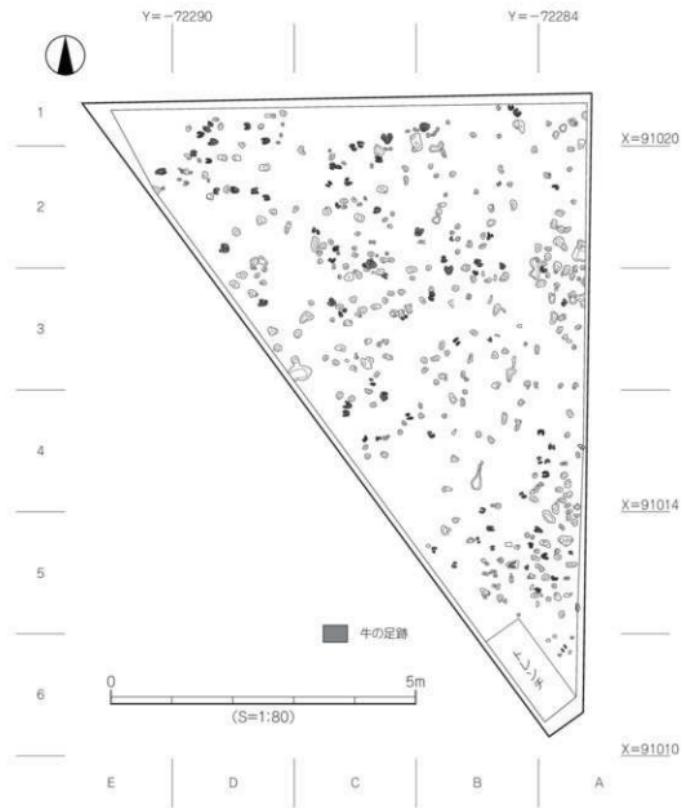
土師器（3～5）

3～5は土師器の壺。3は推定口径11.4cmで、口縁部はやや内湾し、底部外面には回転糸切り痕とスノコ痕が残る。4は推定口径10.6cmで、口縁端部は丸く仕上げる。5は推定口径12.0cmで、口縁端部は尖り気味となる。色調は、内外面共に全て灰褐色である。

瓦器（6）

6は瓦器の底部片で、断面三角形状の高台を貼り付ける。内面にはヘラミガキを施し、色調は内外面共に灰褐色である。

時期：第VI層から出土した遺物の特徴と、後述する水田2などから、水田1は鎌倉時代の終わり頃から室町時代にかけて存在した水田址と考えられる。

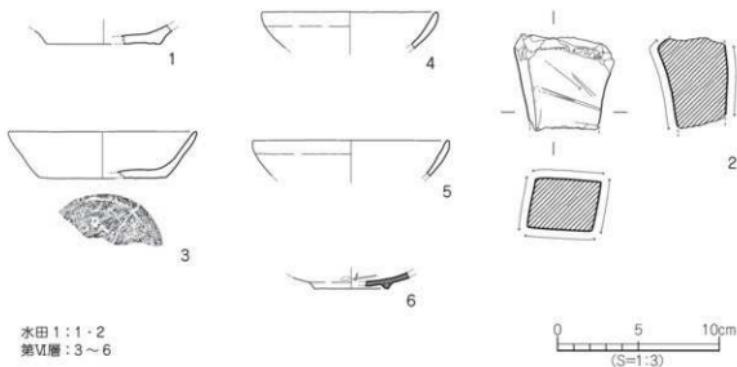


第7図 水田1検出状況図

水田2（第9図、図版4・5）

水田1の下面、第VI層掘り下げ後に検出した水田址で、第VII層褐灰色土（10YR 6/1）が水田土壤である。層厚は2～20cmであり、土壤内に鉄分やマンガン粒を少量含む。水田2上面の標高は、3.7m前後である。水田2の調査は調査壁の崩落を防止するため、水田1検出時の壁面より約50cm内側に調査区を設定した。なお、水田2上面では周囲からの湧水が少量あり、排水のための小トレンチを調査壁沿いに掘削し、調査区南端に排水用の穴を掘削した。

水田2からは水田1と同様、牛や人の足跡と根株痕を検出した。総数は、464ヶである。牛の足跡



第8図 水田 1・第VI層出土遺物実測図

は99ヶを確認でき、大きさは直径3~11cm、深さ1~6cmである。また、人の足跡のうち、確認可能な足跡の長さは10~18cm、深さは1~6cmである。足跡や根株痕は、全て灰白色微砂(10Y 7/1)で埋没している。検出状況から、水田2は洪水等の災害により埋没したものと推測される。その際、埋没した水田2は現況を留めず、その後ろに水田1が構築されたものと思われる。その結果、水田2では畦畔や付帯施設等が遺存しなかったと考えられる。なお、牛の足跡は調査区東側B2からB5区では真北方向に向かって北から南、及び南から北へ進んでおり、少なくとも真北方向を指向する水田区画が存在したものと推測される。足跡や根株痕からは、遺物の出土はない。水田2土壤内からは土器器や須恵器、瓦器の小片が少量出土した。ここでは、水田2土壤内から出土した遺物を掲載する。

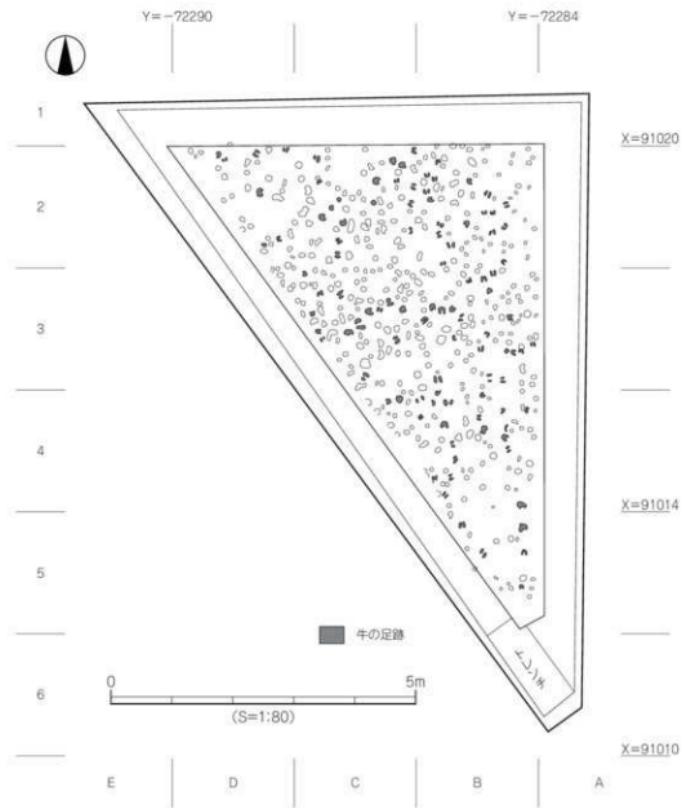
水田2出土遺物（第10図、図版9）

土師器（7~16）

7~13は壺の底部片で、推定底径は6.8~9.5cmである。底部外面には、回転糸切り痕やスノコ痕が残る。なお、8の外面には煤が一部付着している。14~15は皿。14は口径8.3cm、推定底径5.2cm、器高1.7cmで、口縁部はやや内湾する。底部外面は中央部がやや凹み、回転糸切り痕とスノコ痕が残る。15は推定口径8.6cm、推定底径5.8cm、器高1.5cmで、底部外面には回転糸切り痕が残る。16は鍋の口縁部片。推定口径は31.4cmで、口縁部は外反し、口縁端部はナデにより凹む。外面には、粗いハケメ調整がみられる。

瓦器（17~19）

17は和泉型瓦器椀。口縁部片で、推定口径は14.0cmである。内面には、ヨコ方向のヘラミガキと渦巻状の暗文を施す。18は椀の体部片で、内面にはヨコ方向のヘラミガキと平行線状の暗文がみられる。19は皿。推定口径8.2cmで体部中位に稜をもち、内面にはヘラミガキを施す。外面には、指頭痕が顕著に残る。17~19の色調は内外面共に暗灰色であるが、19の外面は一部銀化している。

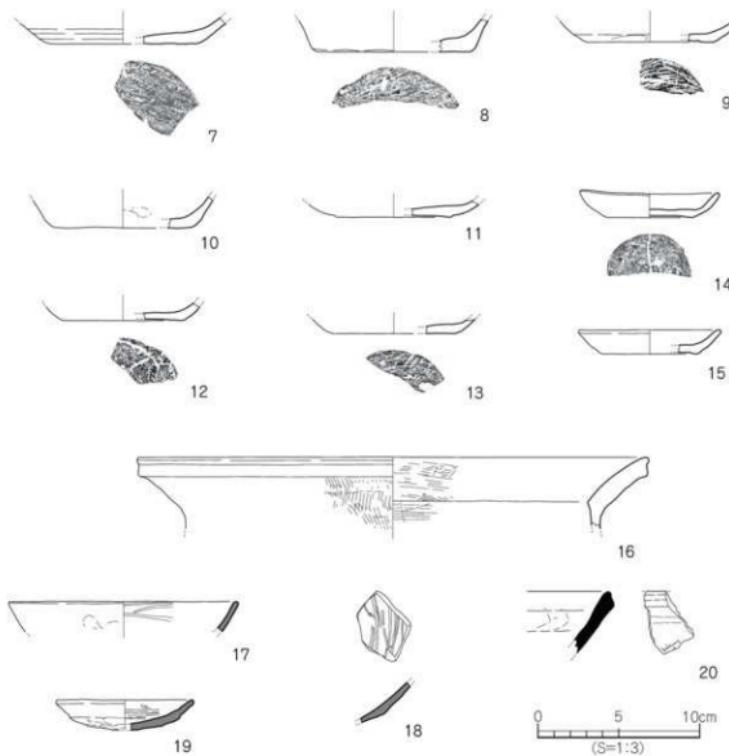


第9図 水田2検出状況図

須恵器 (20)

20は東播系須恵器の鉢。口縁部の小片で、口縁部は僅かに上方へ肥厚し、口縁端面はナデ凹む。色調は、内外面共に灰色である。

時期：出土した遺物の特徴と水田1との関係などから、水田2は概ね鎌倉時代後半期の水田址と考えられる。



第10図 水田2出土遺物実測図

2. 溝

第Ⅸ層上面からは、16条の溝を検出した。溝はすべて、第Ⅷ層で埋没している。検出状況から、溝は水田耕作に伴う跡址、もしくは水田に水を供給するための水路と考えられる。

SD1（第11・12図、図版5～7）

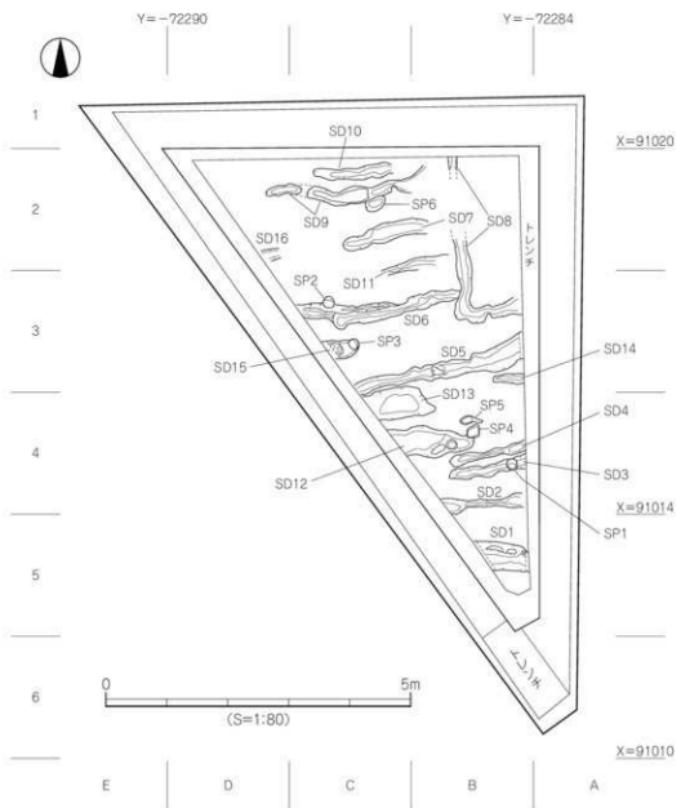
調査地南端B5区で検出した東西方向の溝で、規模は検出長0.90m、幅0.40～0.48m、深さは検出面下16cmである。溝両端は、調査区外に統く。断面形態は舟底状をなし、埋土は第Ⅷ層と同様の褐灰色土（10YR 5/1）単層である。溝基底面は平坦で、高低差は認められない。遺物は埋土中より、土師器片が数点出土した。

出土遺物（第 13 図）

21 は土師器の甕。口縁部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。色調は内外面共に黒褐色をなし、胎土中には多量の砂粒を含む。

SD2（第 11・12 図、図版 5～7）

調査地南側 B4 区で検出した東西方向の溝で、規模は検出長 1.50 m、幅 0.10～0.28 m、深さは検出面下約 30cm である。溝東側は消滅し、西側は調査区外に続く。断面形態は浅いレンズ状をなし、



第 11 図 溝・柱穴検出状況図

埋土は褐灰色土（10YR 5/1）単層である。溝基底面には、凹凸がみられる。溝内からは、遺物の出土はない。

SD3（第 11・12 図、図版 5～7）

調査地南側 B4 区で検出した北東－南西方向の溝で、溝東側は調査区外に続く、一部は SP1 に削平されている。規模は検出長 1.34 m、幅 0.15～0.18 m、深さは検出面下約 2cm である。断面形態は浅いレンズ状をなし、埋土は褐灰色土（10YR 5/1）単層である。溝基底面は、ほぼ平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

SD4（第 11・12 図、図版 5～7）

調査地南側 B4 区で検出した北東－南西方向の溝で、SD3 と併走する。溝東側は、調査区外へ続く。規模は検出長 1.34 m、幅 0.11～0.18 m、深さは検出面下約 2cm である。断面形態は浅いレンズ状をなし、埋土は褐灰色土（10YR 5/1）単層である。溝はやや蛇行し、溝基底面にはやや凹凸がみられる。遺物は、土師器や瓦器の小片が数点出土した。

出土遺物（第 13 図、図版 9）

22 は土師器の椀。断面三角形状の高台を貼り付け、色調は内外面共に灰褐色である。23 は瓦器椀の体部片。内面には、平行線状の暗文を施す。胎土は灰色で、色調は外面が灰褐色、内面は暗灰色である。

SD5（第 11・12 図、図版 5～7）

調査地中央部 B3～C4 区で検出した北東－南西方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。規模は検出長 2.93 m、幅 0.15～0.42 m、深さは検出面下 7cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は褐灰色土（10YR 5/1）単層である。溝はやや蛇行しており、溝基底面には凹凸がみられる。溝からは、遺物の出土はない。

SD6（第 11・12 図、図版 5～7）

調査地中央部や北寄り、B3～C3 区で検出した北東－南西方向の溝で、溝東側は溝 SD8 と重複し、溝西側は調査区外に続く。また、溝西側は SP2 に一部削平されている。規模は検出長 2.68 m、幅 0.12～0.40 m、深さは検出面下約 2cm である。断面形態は浅いレンズ状をなし、埋土は褐灰色土（10YR 5/1）単層である。溝はやや蛇行しており、溝基底面には凹凸がみられる。溝からは、遺物の出土はない。

SD7（第 11・12 図、図版 5～7）

調査地北側 B2～C2 区で検出した北東－南西方向の溝で、溝東側は消滅している。規模は検出長 1.46 m、幅 0.20～0.31 m、深さは検出面下約 2cm である。断面形態は浅いレンズ状をなし、埋土は褐灰色土（10YR 5/1）単層である。溝はやや蛇行しており、溝基底面には凹凸がみられる。遺物は、土師器や須恵器の小片が数点出土した。

出土遺物（第 13 図）

24 は束縛系須恵器の鉢で、口縁部は上方に肥厚する。25 は土師器の甕。外反口縁で、口縁端部は

外傾する。胎土中には、赤色酸化土粒が少量含まれている。

SD8 (第 11・12 図、図版 5～7)

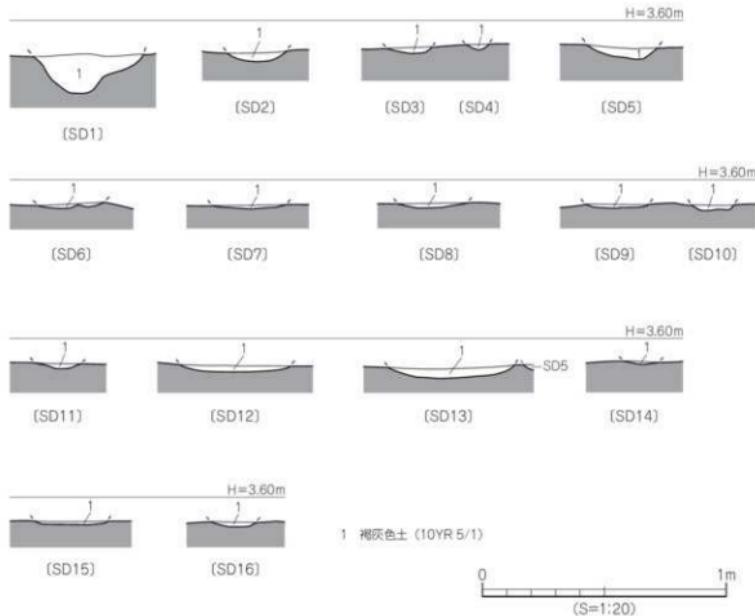
調査地北東部 B2・3 区で検出した溝で、溝両端は調査区外に続き、溝北側は途中で消滅している。「L」字状に折れ曲がる溝で、規模は南北検出長 2.76 m、東西検出長 1.14 m、幅 0.11～0.32 m、深さは検出面下約 2cm である。断面形態は浅いレンズ状をなし、埋土は褐灰色土 (10YR 5/1) 単層である。溝は直線的にのび、溝基底面はほぼ平坦である。遺物は、瓦器の小片が数点出土した。

出土遺物 (第 13 図、図版 9)

26 は瓦器椀。丸味のある断面三角形状の高台を貼り付け、内面には平行線状の暗文を施す。底部外面には、指頭痕が顕著に残る。色調は暗灰色をなすが、外面は重ね焼きにより一部灰色となる。

SD9 (第 11・12 図、図版 5～7)

調査地北端 B2～D2 区で検出した北東～南西方向の溝で、溝東端は消滅している。規模は検出長 2.04m、幅 0.08～0.25 m、深さは検出面下約 2cm である。断面形態は浅いレンズ状をなし、埋土は褐

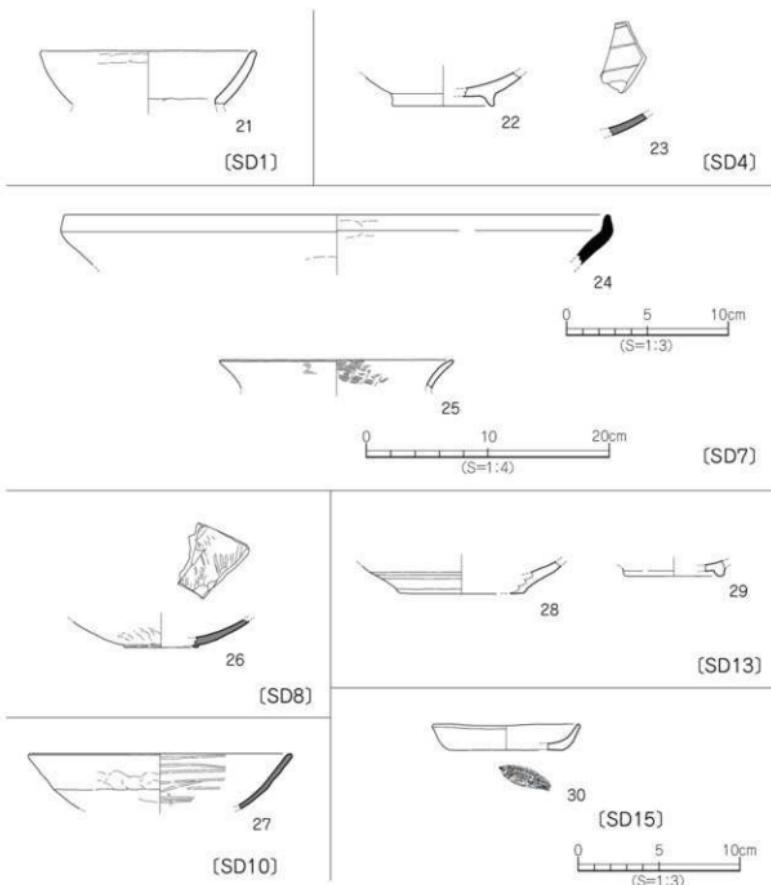


第 12 図 溝断面図

灰色土（10YR 5/1）単層である。溝は蛇行しており、溝基底面には凹凸が著しい。溝からは、遺物の出土はない。

SD10（第11・12図、図版5～7）

調査地北端C2区で検出した東西方向の溝で、溝東端は消滅している。規模は検出長1.50m、幅0.12～0.24m、深さは検出面下約2cmである。断面形態は浅いレンズ状をなし、埋土は褐灰色土（10YR 5/1）単層である。溝基底面は、ほぼ平坦である。溝からは、瓦器の小破片が数点出土した。



第13図 溝出土遺物実測図

出土遺物（第13図）

27は和泉型瓦器椀。口縁部は直立し、体部中位に稜をもつ。内面にはヨコ方向のヘラミガキを施す。胎土は灰色で、色調は外面が暗灰色、内面は灰色である。

SD11（第11・12図、図版5～7）

調査地中央部北寄りB2～C3区で検出した北東～南西方向の溝で、溝両端は消滅している。規模は検出長120m、幅0.12～0.20m、深さは検出面下約2cmである。断面形態は浅いレンズ状をなし、埋土は褐灰色土（10YR 5/1）単層である。溝基底面には、やや凹凸がみられる。溝からは、遺物の出土はない。

SD12（第11・12図、図版5～7）

調査地中央部南寄りB4～C4区で検出した東西方向の溝で、溝西側は調査区外に続く。溝東端は、SP4に一部削平されている。規模は検出長1.43m、幅0.16～0.50m、深さは検出面下約3cmである。断面形態は浅いレンズ状をなし、埋土は褐灰色土（10YR 5/1）単層である。溝基底面は凹凸が著しく、小穴状の凹みが数箇所にみられる。溝からは、遺物の出土はない。

SD13（第11・12図、図版5～7）

調査地中央部南寄りB3～C4区で検出した東西方向の溝で、溝西端は調査区外へ続く。規模は検出長1.22m、幅0.51m、深さは検出面下4cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は褐灰色土（10YR 5/1）単層である。溝基底面は、やや中央部が凹む。溝からは、土師器の小破片が数点出土した。

出土遺物（第13図）

28は土師器の壺。平底で、底部外面には回転糸切り痕が残る。29は土師器の椀で、丸味のある断面方形状の高台を貼り付ける。

SD14（第11・12図、図版5～7）

調査地中央部東寄りB3区で検出した東西方向の溝で、溝東端は調査区外へ続く。規模は検出長0.51m、幅0.08～0.18m、深さは検出面下約2cmである。断面形態は浅いレンズ状をなし、埋土は褐灰色土（10YR 5/1）単層である。溝基底面は、ほぼ平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

SD15（第11・12図、図版5～7）

調査地中央部西寄りC3区で検出した東西方向の溝で、溝西端は調査区外に続き、溝東端はSP3に一部削平されている。規模は検出長0.64m、幅0.31m、深さは検出面下2cmである。断面形態は浅いレンズ状をなし、埋土は褐灰色土（10YR 5/1）単層である。溝基底面には凹凸がみられ、中央部がやや凹む。溝からは、土師器の小片が数点出土した。

出土遺物（第13図）

30は土師器の皿。推定口径8.8cm、器高1.6cmで、体部は内湾し、底部の切り離しは回転糸切り技法による。色調は内外面共に橙色である。なお、胎土中には赤色酸化土粒が少量含まれている。

SD16（第 11・12 図、図版 5～7）

調査地北西部 D2 区で検出した東西方向の溝で溝両端は消滅している。規模は検出長 0.28 m、幅 0.17 m、深さは検出面下 2cm である。断面形態は浅いレンズ状をなし、埋土は褐灰色土（10YR 5/1）単層である。溝基底面は平坦で、溝からは、遺物の出土はない。

3. 柱 穴

第Ⅷ層上面からは、柱穴 6 基を検出した。柱穴の埋土は、全て第Ⅶ層と同様である。柱穴からは、遺物の出土は見られなかったが、溝より後出す遺構である。

SP1（第 11・14 図、図版 5～7）

調査地南東部 B4 区で検出した柱穴で、SD3 より後出す。平面形態は円形をなし、規模は直径 0.17 m、深さは検出面下 12cm である。柱穴掘り方埋土は、褐灰色土（10YR 5/1）単層である。

SP2（第 11・14 図、図版 5～7）

調査地中央部北西寄り C3 区で検出した柱穴で、SD6 より後出す。平面形態は不整の円形をなし、規模は直径 0.17 m、深さは検出面下 10cm である。柱穴掘り方埋土は、褐灰色土（10YR 5/1）単層である。

SP3（第 11・14 図、図版 5～8）

調査地中央部西寄り C3 区で検出した柱穴で、SD15 より後出す。平面形態は不整の円形をなし、規模は直径 0.18m、深さは検出面下 11cm である。柱穴掘り方埋土は、褐灰色土（10YR 5/1）単層である。

SP4（第 11・14 図、図版 5～7）

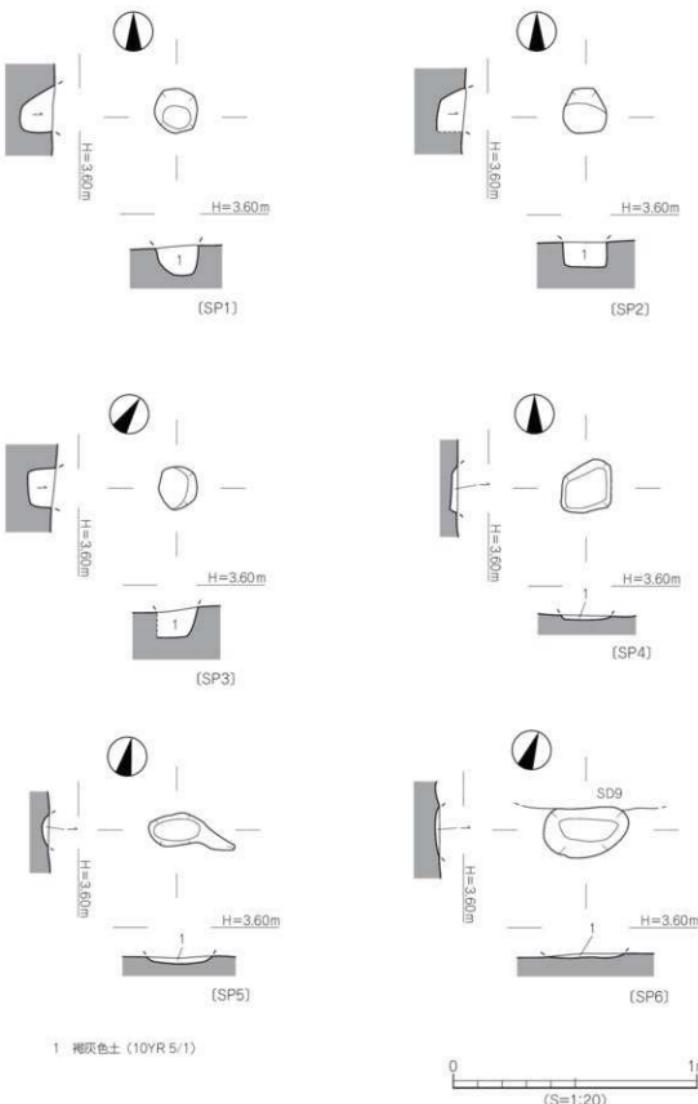
調査地中央部南東寄り B4 区で検出した柱穴で、SD12 より後出す。平面形態は不整の方形をなし、規模は直径 0.19～0.21 m、深さは検出面下約 2cm である。柱穴掘り方埋土は、褐灰色土（10YR 5/1）単層である。

SP5（第 11・14 図、図版 5～7）

調査地中央部南東寄り B4 区で検出した柱穴で、平面形態は不定形をなし、規模は長径 0.33 m、短径 0.16 m、深さは検出面下約 3cm である。柱穴掘り方埋土は、褐灰色土（10YR 5/1）単層である。

SP6（第 11・14 図、図版 5～7）

調査地北側 C2 区で検出した柱穴で、平面形態は梢円形をなし、規模は長径 0.35 m、短径 0.20 m、深さは検出面下約 2cm である。柱穴掘り方埋土は、褐灰色土（10YR 5/1）単層である。



第 14 図 柱穴測量図

4. 包含層・地点不明出土遺物

本調査では第Ⅷ層や第Ⅹ層中より、鎌倉時代の土師器や須恵器、瓦器のほかに国産陶磁器（亀山焼）や輸入陶磁器（白磁・青磁）、石製品や木製品、種子が出土した。なお、出土した種子は全てモモで、個数は9個である。このほか、第X層からは弥生時代終末期の土器片が出土している。また、表土掘削時に遺物が少量出土したが、これらは「地点不明出土遺物」として掲載している。

(1) 第Ⅷ層出土遺物 (第15～17図、図版10・11)

土師器 (31～61)

31～47は壺。31は推定口径13.4cm、器高2.7cmで、体部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。32は推定口径14.0cm、器高3.3cmで、体部はやや内湾し、口縁部は尖り気味に丸く仕上げる。33は推定口径14.0cmで、体部は内湾する。34・35は口縁部が尖り気味に仕上げられ、36は体部中位に稜をもつ。37～47は底部片。推定底径6.4～9.4cmで、底部の切り離しは全て回転糸切り技法による。なお、スノコ痕が残るものが8点ある(37～39・41・42・44～46)。48～54は椀。48は推定口径15.8cmで、体部中位に稜をもち、口縁部は直立する。49は推定口径15.1cmで、体部上位に稜をもつ。50～54は底部片。底径4.9～7.5cmで、53・54は断面方形状の高台を貼り付ける。55・56は皿。55は口縁部を一部欠損するものの、ほぼ完形品で、口径9.0cm、底径5.9cm、器高1.6cmである。底部外面には回転糸切り痕とスノコ痕が残る。56は推定口径7.9cm、器高1.4cmで、底部中央部は凹み、外面には回転糸切り痕を残す。57・58は鍋。57の口縁部は内湾し、口縁部内面には粗いハケメ調整がみられる。58の内外面には、多量の煤が付着している。59・60は移動式の甕である。61は古墳時代初頭の甕。外反口縁で、口縁端部は外傾する面をなす。

瓦器 (62～70)

62は和泉型瓦器椀。推定口径13.6cmで、口縁部は直立し、口縁部内面にはヘラミガキを施す。63～68は底部片。63の内面には、直交する平行線状の暗文を施す。64～68は断面三角形状の高台を貼り付け、内面には平行線状の暗文がみられる。なお、67は重ね焼きにより、内外面の色調は灰色をなす。69・70は皿。体部中位は稜をなし、70の内面には平行線状の暗文を施す。

須恵器 (71～73)

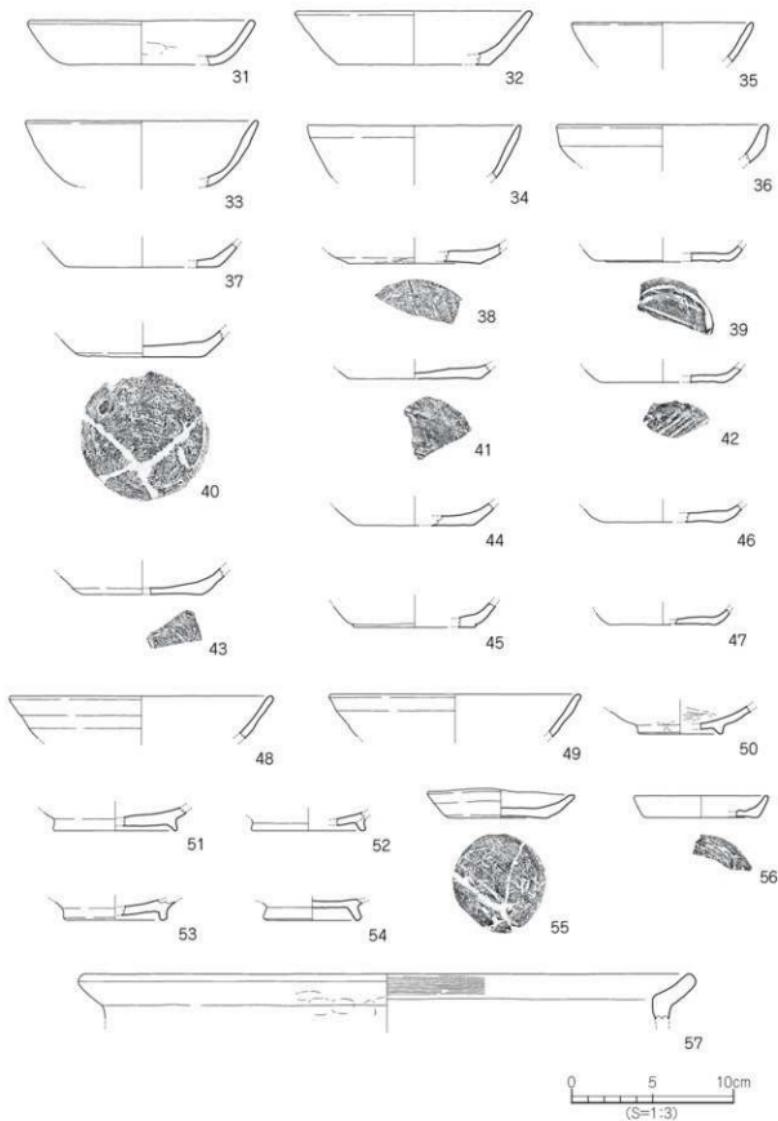
71は東播系の鉢で、口縁部は上方へ僅かに肥厚する。72は甕または鉢の底部片、73は胴部片である。73の外面には平行叩きがみられ、内面はナデにより仕上げられている。

陶磁器 (74～77)

74は亀山焼の甕。胴部片で、外面は格子目叩き、内面にはハケメ調整がみられる。色調は、内外面共に暗灰色である。75・76は白磁碗。口縁部は短く外反し、胎土は灰白色で、白色釉が全面に掛けられている。77は青磁碗。体部片で、胎土は灰色をなし、薄緑色の釉が掛けられている。

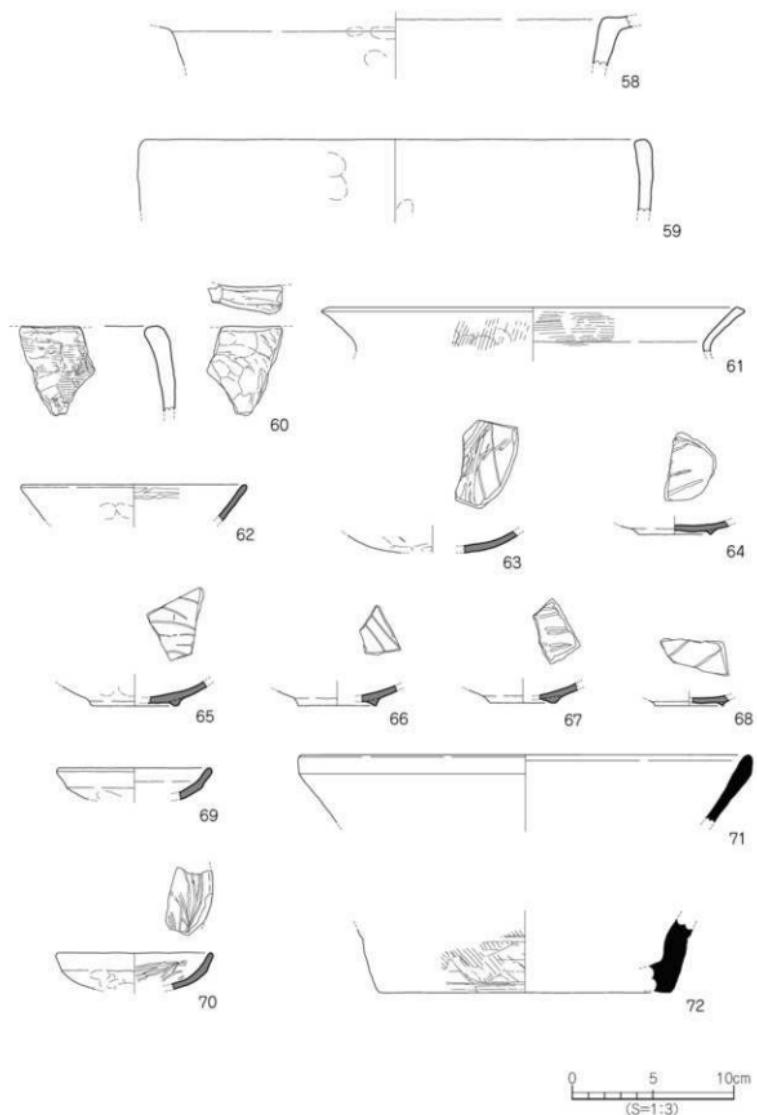
木製品 (78～80)

78は板状の木製品で、残存長10.3cm、残存幅1.4cm、厚さは0.4cmである。側面の片側は面取されているが、反対の側面と両端は欠損している。79は板材の破片で、残存長10.9cm、残存幅0.6cm、厚さは0.4cmである。78・79の用途は、不明である。80は箸で、残存長9.5cm、幅0.4cm、厚さ0.4cmである。断面形態は六角形状をなし、先端部は欠損している。78～80は、針葉樹を素材としている。

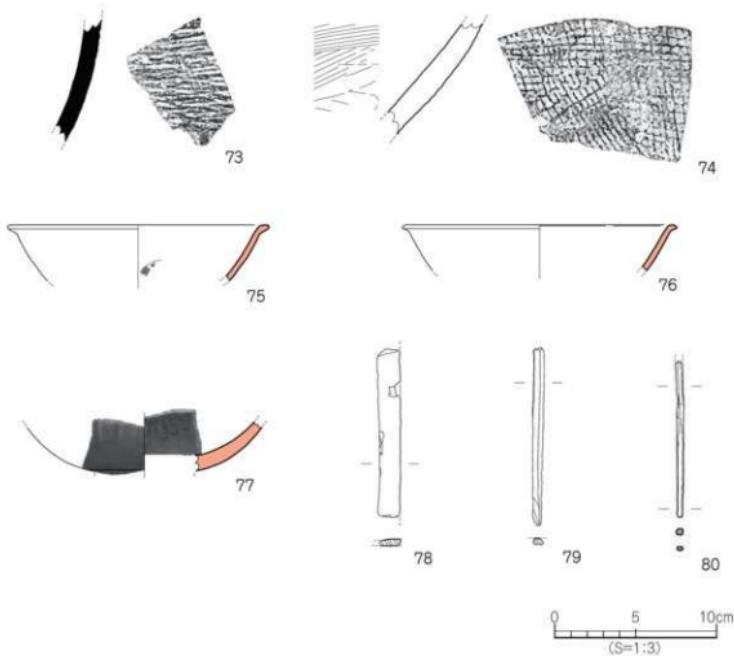


第15図 第VII層出土遺物実測図(1)

調査の概要



第16図 第VII層出土遺物実測図(2)



第17図 第17層出土遺物実測図（3）

(2) 第IX層出土遺物（第18図、図版12）

土師器（81～87）

81～84は壺。81は推定口径13.2cmで、口縁部はやや内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。82は推定口径13.6cm、83は推定口径12.6cmである。なお、83の体部中位には僅かに稜をもつ。84は底部片で、外面には回転糸切り痕とスノコ痕が残る。85・86は皿。85は推定口径8.9cm、器高1.5cmで、口縁部は僅かに外反し、底部外面には回転糸切り痕とスノコ痕が残る。86は推定口径10.0cm、器高1.4cmで、口縁部は僅かに外反する。81～86の色調は、全て灰褐色である。87は高壺。壺部片で、脚部との接合は充填技法による。色調は、内外面共に褐色である。

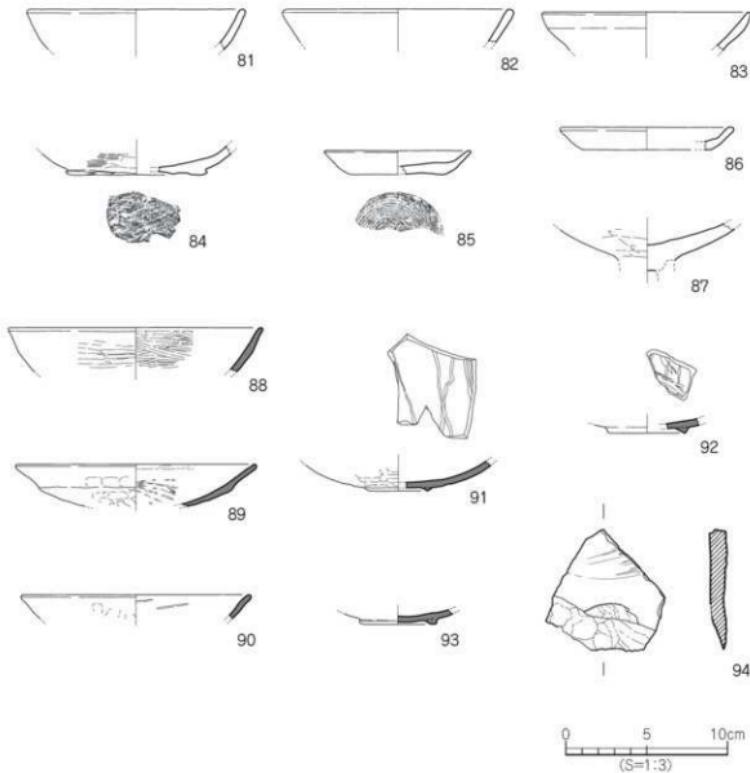
瓦器（88～93）

88～90は和泉型瓦器椀。88は推定口径17.6cm、口縁部は僅かに外反し、体部内外面にはヨコ方向の丁寧なヘラミガキを施す。89は推定口径14.7cmで、体部中位に稜をもち、底部外面には指頭痕が

顕著に残る。90は推定口径14.0cmで、内面にはヘラミガキを施す。91～93は底部片。91・92は断面三角形状の高台を貼り付け、内面には平行線状の暗文を施す。91の底部外面には、指頭痕が残り、色調は外側が一部灰色をなす。93は丸味のある断面逆台形状の高台を貼り付け、胎土は灰黄色をなす。

石器(94)

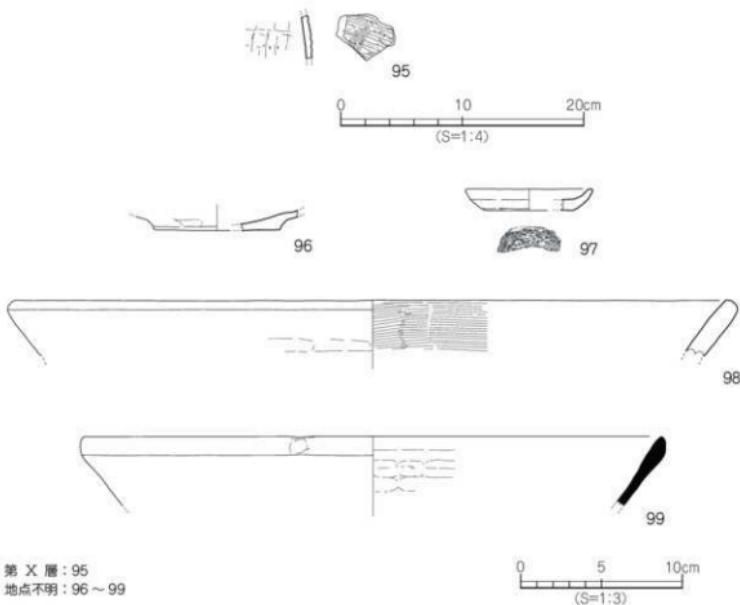
94は、弥生時代の粗製剝片刃器(スクレイパー)である。自然面と剥離面を残し、二箇所に刃部をもつ。安山岩製。



第18図 第IX層出土遺物実測図

(3) 第X層・地点不明出土遺物 (第19図、図版12)

95は第X層出土品。弥生時代終末に時期比定される壺の胴部片で、外面には粗いタタキが施されている。96～99は地点不明出土品。96は土師器の坏。円盤高台状の底部片で、外面には回転糸切り痕が残る。97は土師器の皿。小片で、底部外面に回転糸切り痕を看守する。98は土師器の鉢。口縁部は内湾し、内面には粗いハケメ調整がみられる。99は東播系須恵器の鉢。口縁部の小片で、僅かに肥厚する。色調は、内外面共に灰色である。



第19図 第X層・地点不明出土遺物実測図

第3節 小 結

本調査では水田址のほか、中世段階の堆積層を確認した。水田1は標高4m前後の地点にて検出された水田址で、灰色土を水田土壤とする。層厚は2～12cmを測り、水田1からは人や牛の足跡、根株痕など総数441ヶを検出した。これらは、全て洪水等による砂で埋没している。一方、水田2は水田1の下面、標高3.7m前後の地点で検出された水田址で、褐灰色土が水田土壤である。層厚は2～20cmを測り、水田2からは足跡や根株痕が464ヶ検出されている。これらは、全て砂で埋没している。

水田1・2からは畦畔や水田に伴う付帯施設は検出されず、水田区画の形状や規模等は不明である。なお、水田土壤内や足跡埋土中からは、主に鎌倉時代に使用された土師器壺、皿、椀のほか調理具である土鍋のほか、瓦器碗や白磁などの破片が比較的多く出土した。出土品や検出層位から、水田1・2は概ね鎌倉時代、13～14世紀代の構築と考えられる。

また、水田2の下面にある第IX層上面では溝16条と柱穴6基を検出した。溝は東西方方向に延びるものと「L」字状に折れ曲がるものがあり、溝幅8～51cm、深さは2～16cm程度である。溝からは土師器や須恵器、瓦器などの小破片が数点出土している。また、柱穴は6基検出したが、埋土は第VII層と同様の褐灰色土である。柱穴の大半は検出した溝より後出することから、本来は第VII層以上の土層から掘削された遺構と考えられる。なお、第VII層中からは、鎌倉時代の土器片が出土したほか、木製の箸や加工痕が残る木片、種子（モモ）などが出土している。

第IX層下には、黄灰色や灰白色の砂や礫層（第X層）が検出された。調査地周辺では、西方にある東垣生八反地遺跡1次調査や東方の余戸柳井田遺跡6次調査にて自然流路が検出されていることから、本調査検出の第X層はこれら流路の一部と推測される。このことから、第IX層堆積以前、つまり鎌倉時代以前には調査地や近隣地域は安定した地盤が形成されていなかったと考えられる。

狭小範囲の調査ではあったが、調査地周辺に存在する中世段階における水田址の広がりを確認できたことや、中世以前に存在した自然流路の検出など、多大なる成果を得ることができた。

遺構一覧・遺物観察表　－凡例－

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

地区欄　グリッド名を記載。

規模欄　()は現存値を示す。

出土遺物欄　遺物名称を略記した。

例) 土師→土師器、須恵→須恵器

(2) 遺物観察表

法量欄　()：復元推定値

胎土欄　胎土欄は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ

()の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1～2)→「1～2mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄　焼成欄の略記について

◎→ 良好

遺物観察表

表3 溝一覧

溝 (S.D.)	地 区	方 向	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	B5	東西	角底状	(090) × 0.40 ~ 0.48 × 0.16	褐灰色土	土師	鎌倉時代	
2	B4	東西	レンズ状	(150) × 0.10 ~ 0.28 × 0.03	褐灰色土		鎌倉時代	
3	B4	北東 - 南西	レンズ状	(134) × 0.15 ~ 0.18 × 0.02	褐灰色土		鎌倉時代	
4	B4	北東 - 南西	レンズ状	(134) × 0.11 ~ 0.18 × 0.02	褐灰色土	土師・瓦器	鎌倉時代	
5	B3 ~ C4	北東 - 南西	レンズ状	(293) × 0.15 ~ 0.42 × 0.07	褐灰色土		鎌倉時代	
6	B3 ~ C3	北東 - 南西	レンズ状	(268) × 0.12 ~ 0.40 × 0.02	褐灰色土		鎌倉時代	
7	B2 ~ C2	北東 - 南西	レンズ状	(146) × 0.20 ~ 0.31 × 0.02	褐灰色土	土師・須恵	鎌倉時代	
8	B2・3	北→東	レンズ状	(276) × 0.11 ~ 0.32 × 0.02	褐灰色土	瓦器	鎌倉時代	
9	B2 ~ D2	北東 - 南西	レンズ状	(204) × 0.08 ~ 0.25 × 0.02	褐灰色土		鎌倉時代	
10	C2	東西	レンズ状	(150) × 0.12 ~ 0.24 × 0.02	褐灰色土	瓦器	鎌倉時代	
11	B2 ~ C3	北東 - 南西	レンズ状	(120) × 0.12 ~ 0.20 × 0.02	褐灰色土		鎌倉時代	
12	B4 ~ C4	東西	レンズ状	(143) × 0.16 ~ 0.50 × 0.03	褐灰色土		鎌倉時代	
13	B3 ~ C4	東西	レンズ状	(122) × 0.51 × 0.04	褐灰色土	土師	鎌倉時代	
14	B3	東西	レンズ状	(051) × 0.08 ~ 0.18 × 0.02	褐灰色土		鎌倉時代	
15	C3	東西	レンズ状	(064) × 0.31 × 0.02	褐灰色土	土師	鎌倉時代	
16	D2	東西	レンズ状	(028) × 0.17 × 0.02	褐灰色土		鎌倉時代	

表4 柱穴一覧

柱穴 (S.P.)	地 区	平 面 形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	備 考
1	B4	円形	0.17 × 0.17 × 0.12	褐灰色土		SD3より後出
2	C3	不整円形	0.17 × 0.17 × 0.10	褐灰色土		SD6より後出
3	C3	不整円形	0.18 × 0.18 × 0.11	褐灰色土		SD15より後出
4	B4	不整形	0.21 × 0.19 × 0.02	褐灰色土		SD12より後出
5	B4	不定形	0.33 × 0.16 × 0.03	褐灰色土		
6	C2	楕円形	0.35 × 0.20 × 0.02	褐灰色土		

表5 水田1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 換 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	环	底径 (7.0) 残高 1.2	底部小片。摩滅が激しく、器表面の調整は不明。	マメツ	マメツ	灰褐色 灰褐色	密 ○		

調査の概要

表6 水田1出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
2	砥石	約1/2	石英類面岩	5.8	5.9	4.1	174.25 携帯用	9

表7 第VI層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
3	坏	口径(11.4) 底径(7.8) 器高2.9	口縁部は内溝し、底部外側には回転糸切り痕とスノコ痕を残す。 1/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1~2) ○		9
4	坏	口径(10.6) 残高2.2	口縁部は内溝し、口縁端部は丸く仕上げる。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	密 ○	黒斑	
5	坏	口径(12.0) 残高2.3	口縁部は内溝し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1) ○		
6	椀	底径(4.4) 残高1.0	瓦器。断面三角形状の高台を貼付けた。1/3の残存。	ヨコナデ	ヘラミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長(1) ○		

表8 水田2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
7	坏	底径(9.3) 残高1.2	底部片。底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。1/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1) 金 ○		9
8	坏	底径(9.5) 残高1.9	底部片。底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。1/2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1~2) 保谷番 ○		9
9	坏	底径(7.6) 残高1.5	底部片。底部外面に回転糸切り痕あり。1/4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	密 ○	黒斑	9
10	坏	底径(8.6) 残高1.9	底部片。磨滅のため調整は不明。1/4の残存。	マメツ	マメツ	灰褐色 灰褐色	石・長(1) ○		
11	坏	底径(6.8) 残高1.0	底部片。底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。	マメツ	ヨコナデ	黒褐色 黒褐色	密 ○		
12	坏	底径(7.2) 残高1.1	底部片。底部外面に回転糸切り痕あり。1/4の残存。	マメツ	マメツ	灰褐色 灰褐色	石(1) ○		
13	坏	底径(7.4) 残高0.9	底部片。底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。1/5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (指頭痕)	灰褐色 黒褐色	石・長(1) 金 ○		
14	皿	口径(8.3) 底径(5.8) 器高1.7	1/2の残存。底部中央部が凹み、底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ○		9
15	皿	口径(8.6) 底径(5.8) 器高1.5	小片。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	密 金 ○		
16	鍋	口径(31.4) 残高4.3	口縁部小片。口縁端部はナデにより凹む。6本/cm	ヨコナデ (指頭痕)	ハケ(6本/cm)	灰褐色 灰褐色	石・長(1) ○		
17	椀	口径(14.0) 残高1.8	瓦器。口縁部内面に満巻状の暗文あり。小片。	ヨコナデ	ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	長(1) ○		9
18	椀	残高2.3	瓦器。体部内面に平行線状の暗文あり。小片。	ヨコナデ (指頭痕)	ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	石・長(1~2) 金 ○		9
19	皿	口径(8.2) 残高1.9	瓦器。体部内に横に棱をもつ。体部内面に暗文状のミガキを施す。1/4の残存。	ヨコナデ (指頭痕)	ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	石・長(1~3) 金 ○		9
20	鉢	残高3.9	東播系須恵器。口縁端部はナデ凹む。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		

遺物観察表

表9 溝出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
21	甕	口径(130) 残高 33	内面口縁、口縁端部は丸く仕上げる。 小片。	ヨコナデ	ナデ	黒褐色 黒褐色	石・長(1~2) ○	SD1 黒斑	
22	甕	底径(62) 残高 21	底部部。断面三角形状の高台を貼付ける。1/4の残存。	ヨコナデ	ハケ→ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ○	SD4	9
23	甕	残高 13	瓦型。体部内面に平行線文を施す。 小片。	ナデ	ナデ	灰褐色 暗灰色	密 ○	SD4	9
24	甕	口径(334) 残高 31	東播系須恵器。口縁部は上方に肥厚する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	SD7	
25	甕	口径(188) 残高 24	外反口縁。口縁端部は尖り気味に仕上げる。小片。	ハケ→ナデ	ハケ(6本/cm)	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) 赤色酸化土粒 ○	SD7	
26	甕	底径(44) 残高 17	瓦型。丸味のある断面三角形状の高台を貼付ける。内面に平行線状の施文(指頭痕)を施す。1/4の残存。	ナデ (指頭痕)	ヘラミガキ	灰色・暗灰色 暗灰色	密 ○	SD8	9
27	甕	口径(160) 残高 34	和泉型瓦器甕。口縁部は直立気味に立ち上がり体部中位に棱をもつ。1/5の残存。	ナデ	ヘラミガキ	暗灰色 灰色	密 ○	SD10	
28	环	底径(76) 残高 20	底体部小片。底部外間に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	マメツ	茶褐色 茶褐色	密 ○	SD13	
29	甕	底径(60) 残高 09	丸味のある断面方形状の高台を貼付ける。小片。	ヨコナデ	マメツ	灰褐色 灰褐色	密 ○	SD13	
30	皿	口径(88) 底径(69) 器高 16	小片。底部外間に回転糸切り痕を残す。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	密 赤色酸化土粒 ○	SD15	

表10 第VII層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
31	环	口径(134) 底径(89) 器高 27	体部は直立し、口縁端部は丸く仕上げる。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	密 ○		
32	环	口径(140) 底径(93) 器高 33	体部はやや内湾し、口縁端部は尖り気味に丸い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1) 金 ○		
33	环	口径(140) 残高 40	体部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。小片。	マメツ	マメツ	灰褐色 灰褐色	密 ○		
34	环	口径(130) 残高 33	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は尖り気味に仕上げる。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	長(1) ○		
35	环	口径(109) 残高 24	体部は内湾し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 褐色	石・長(1~2) 金 ○		
36	环	口径(126) 残高 23	体部中位で棱をなし、口縁端部は丸く仕上げる。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	密 ○		10
37	环	底径(94) 残高 12	底部外間に回転糸切り痕とスノコ痕があり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1) 金 ○		
38	环	底径(81) 残高 12	底部中央部が凹み、外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。1/4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	長(1) 金 ○		
39	环	底径(80) 残高 10	底部外間に回転糸切り痕とスノコ痕あり。1/5の残存。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	長(1) 赤色酸化土粒 ○		10
40	环	底径 78 残高 16	平底。底部外間に回転糸切り痕あり。 底部完形品。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	密 赤色酸化土粒 ○	黒斑	10

調査の概要

第V層出土物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) 内面	胎 土 燒 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
41	坏	底径 残高 (7.8) 0.5	平底。底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。1/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1) 金○		
42	坏	底径 残高 (7.4) 0.8	底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1) 金○		
43	坏	底径 残高 (7.4) 1.6	底部外面に回転糸切り痕あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密○		
44	坏	底径 残高 (7.3) 1.1	底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1) 金○		
45	坏	底径 残高 (7.2) 1.5	円盤状の底部。底部外面にスノコ痕あり。小片。	マメフ	マメフ	灰白色 灰白色	石(1) 赤色酸化土粒○		
46	坏	底径 残高 (7.2) 0.8	凹凸のある底部。底部外面にスノコ痕あり。1/4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1) 金○		
47	坏	底径 残高 (6.4) 0.9	底部外面に回転糸切り痕あり。1/5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色 暗褐色	密○		
48	椀	口径 残高 (15.8) 2.6	体部中央に棱をもち、口縁部は直立気味。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1~3) ○		
49	椀	口径 残高 (15.1) 2.6	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は丸く仕上げる。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色 暗褐色	密○		
50	椀	底径 残高 (4.9) 1.7	断面三角形状の高台を貼付ける。1/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	密○		10
51	椀	底径 残高 (7.5) 1.1	断面三角形状の高台を貼付ける。1/4の残存。	マメフ	マメフ	暗褐色 暗褐色	石・長(1) ○		10
52	椀	底径 残高 (6.8) 0.7	丸味のある断面三角形状の高台を貼付。1/4の残存。	マメフ	マメフ	暗褐色 暗褐色	石・長(1~3) ○		10
53	椀	底径 残高 (6.0) 1.1	丸味のある断面方形状の高台を貼付。1/4の残存。	マメフ	マメフ	黄褐色 橙色	石・長(1) 赤色酸化土粒○		
54	椀	底径 残高 (5.4) 1.3	断面方形状の足部高台を貼付。1/5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ○		10
55	皿	口径 底径 器高 9.0 5.9 1.6	口縁部を一部欠損。器形に歪みあり。底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕を残す。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1) 金○		10
56	皿	口径 底径 器高 (6.9) (6.8) 1.4	底部中央部が凹み、底部外面に回転糸切り痕を残す。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	密○		
57	鍋	口径 残高 (37.0) 2.8	口縁部は内湾し、口縁端部は「コ」字状に丸く仕上げる。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ →ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1~3) 金○	保有者	10
58	鍋	残高 2.4	口縁部は外反する。小片。	ナデ (指頭痕)	ナデ	黑色 茶褐色	石・長(1~3) ○	保有者	
59	カマド	口径 残高 (30.6) 4.4	置きカマド。口縁部は内方に僅かに肥厚する。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	黑褐色 黑褐色	石・長(1~2) 金○	保有者	
60	カマド	残高 5.2	置きカマド。口縁部は内湾し、僅かに肥厚する。小片。	ヨコナデ	ハケ(6本/cm) →ナデ	黑褐色 黑褐色	石・長(1~2) 金○	保有者	10
61	甕	口径 残高 (26.0) 2.7	外反口縁。口縁端部は外傾する面をなす。小片。	ハケ(5本/cm)	ハケ(7本/cm)	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) 赤色酸化土粒○		
62	甕	口径 残高 (13.6) 2.3	和泉型瓦器甕。口縁部は直立し、口縁内面に筋文状のヘラミガキを施す。小片。	ヨコナデ (指頭痕)	ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	石・長(1~2) ○		

遺物観察表

第V層出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
63	碗	残高 1.3	瓦器。底部内面に平行線状の暗文あり。1/5の残存。	ナデ(指頭瓶)	ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	石・長(1) ○		10
64	碗	底径 (4.5) 残高 0.8	瓦器。断面三角形状の小さな高台を貼付け、内面に平行線状の暗文を施す。1/5の残存。	ヨコナデ	ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	石・長(1) ○		11
65	碗	底径 (5.4) 残高 1.2	瓦器。断面三角形状の高台を貼付け、内面に平行線状の暗文を施す。1/5の残存。	ナデ(指頭瓶)	ヘラミガキ	暗灰色・灰 暗灰色	石・長(1) ○		11
66	碗	底径 (4.8) 残高 1.2	瓦器。断面三角形状の高台を貼付け、内面に平行線状の暗文を施す。小片。	ヨコナデ	ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	密 ○		
67	碗	底径 (4.0) 残高 1.2	瓦器。丸味のある断面三角形状の低い高台を貼付け、内面に平行線状の暗文を施す。1/5の残存。	ヨコナデ	ヘラミガキ	灰色 灰色	密 ○		11
68	碗	底径 (4.0) 残高 0.6	瓦器。断面三角形状の高台を貼付け、内面に平行線状の暗文を施す。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰色 暗灰色	密 ○		
69	皿	口径 (9.4) 残高 1.9	瓦器。体部中位は棱をなし、口縁部は丸く仕上げる。1/5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	黑色 黑色	密 ○		
70	皿	口径 (8.4) 残高 2.2	瓦器。体部中位は棱をなし、内面に平行線状の暗文を施す。1/4の残存。	ナデ(指頭瓶)	ヘラミガキ	黑色 黑色	密 ○		
71	鉢	口径 (27.5) 残高 4.2	東播系須恵器。口縁部は僅かに上方へ膨厚する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ○		
72	壺	底径 (17.9) 残高 3.9	底盤片。1/5の残存。	ハケ・ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		11
73	壺	残高 7.6	胴部小片。	平行叩き	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		11
74	壺	残高 6.8	龜山焼。胴部小片。	格子目叩き	ハケ (4本/cm)	暗灰色 暗灰色	密 ○		11
75	碗	口径 (16.0) 残高 3.5	粗器。口縁部は短く外反する。小片。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 ○		11
76	碗	口径 (16.3) 残高 2.9	粗器。口縁部は短く外反する。小片。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 ○		11
77	碗	残高 3.0	青磁。	施釉	施釉	薄緑色 薄緑色	密 ○		11

表11 第V層出土遺物観察表 木製品

番号	器種	遺存状態	樹種	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
78	板材片	—	針葉樹	10.3	1.4	0.4		11
79	板材片	—	針葉樹	10.9	0.6	0.4		11
80	箸	ほぼ完形	針葉樹	9.5	0.4	0.4		11

表12 第VI層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
81	环	口径 (13.2) 残高 2.5	口縁部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1) 金 ○		

調査の概要

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
82	坏	口径 (13.6) 残高 2.1	口縁部は直立し、口縁端部は丸く仕上げる。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	密 ○		
83	坏	口径 (12.6) 残高 2.4	体部に棱をもち、口縁端部は尖り気味に丸く仕上がる。小片。	マメフ	マメフ	灰褐色 灰褐色	密 ○	12	
84	坏	底径 (8.0) 残高 1.8	底部中央部は凹み、底部外面には回転系切り痕とスノコ痕を残す。1/4の残存。	ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	密 ○	12	
85	皿	口径 (8.9) 底径 (5.7) 器高 1.5	口縁部は僅かに外反し、底部外面には回転系切り痕とスノコ痕を残す。	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~2) ○	12	
86	皿	口径 (10.0) 底径 (7.8) 器高 1.4	口縁部は僅かに外反し、口縁端部は丸く仕上げる。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) 金 ○		
87	高坏	残高 2.5	坏部片。坏脚部の接合は充填技法による。1/4の残存。	マメフ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1) 金 ○	12	
88	椀	口径 (17.6) 残高 2.7	和泉型瓦器椀。口縁部は僅かに外反し、口縁端部は丸く仕上げる。小片。	ヨコナデ ヘラミガキ	ヨコナデ ヘラミガキ	灰褐色 灰褐色	密 ○		
89	椀	口径 (14.7) 残高 5.5	和泉型瓦器椀。体部中位に棱をもち、口縁部は丸く仕上げる。小片。	ヨコナデ (指頭痕)	ヨコナデ ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	密 黑色酸化土粒 ○		
90	椀	口径 (14.0) 残高 1.5	和泉型瓦器椀。口縁部は僅かに外反する。小片。	ヨコナデ (指頭痕)	ヨコナデ (ミガキ)	暗灰色 暗灰色	石・長 (1) ○		
91	碗	底径 (3.7) 残高 1.6	瓦器。断面三角形状の高台を貼付けた内面には平行線状の縞文を施す。1/2の残存。	ナデ (指頭痕)	ヘラミガキ	褐色 褐色	石・長 (1) ○	12	
92	椀	底径 (4.8) 残高 0.5	瓦器。断面三角形状の高台を貼付けた内面には平行線状の縞文を施す。小片。	ナデ	ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	石・長 (1) ○		
93	椀	底径 4.6 残高 0.9	瓦器。丸味のある断面逆台形状の高台を貼付ける。	ヨコナデ	マメフ	黑色 黑色	密 ○		12

表 13 第Ⅹ層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量			備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
94	スクレイバー	完存	安山岩	7.3	7.0	1.0	61.58	12

表 14 第Ⅺ層・地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
95	甕	残高 3.1	胴部小片。	タタキ→ハケ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ○	第Ⅺ層	12
96	坏	底径 (7.4) 残高 1.2	円盤高台状の底部。摩滅のため器表前面の調整は不明。1/4の残存。	マメフ	マメフ	灰褐色 灰褐色	密 ○	地点不明	
97	皿	口径 (7.8) 底径 (5.4) 器高 1.3	底部外縁に回転系切り痕あり。1/5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	密 ○	地点不明 黒斑	
98	鍋	口径 (43.2) 残高 3.4	口縁部小片。	ヨコナデ	ハケ (4本/cm)	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) 金 ○	地点不明 保有者	12
99	鉢	口径 (35.6) 残高 4.3	東播系須恵器。口縁部は肥厚する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	地点不明	12

第4章 調査の成果と課題

東垣生八反地遺跡5次調査は、市道垣生109号線外1路線道路改良工事（その2）に伴い実施した埋蔵文化財の発掘調査である。調査地が所在する松山平野西部地域は、近年まで本格的な発掘調査が実施されておらず、遺跡の様相は不明であった。ところが、平成26年度から実施した松山外環状道路建設工事に伴う発掘調査（余戸中ノ孝遺跡、余戸柳井田遺跡、東垣生八反地遺跡、南吉田南代遺跡）からは弥生時代から中世に至る遺構・遺物が数多く発見され、遺跡の存在が明らかになってきた。

同調査では、本調査地の南東部にある余戸中ノ孝遺跡3次調査において弥生時代後期から終末期の堅穴建物や溝・土坑が検出され、調査地の北西部にある南吉田南代遺跡からは弥生時代前期から古墳時代までの遺物を含む包含層が検出されている。なお、この包含層中からは弥生時代終末期から古墳時代前期に時期比定される土器が大量に出土している。古墳時代では前述の余戸中ノ孝遺跡3次調査のほかに同5次調査から古墳時代中期から後期の堅穴建物や溝などが検出され、とりわけ、5次調査検出のSB1からは、市場南組窯址の製品と思われる須恵器片が多数出土している。

古代の遺跡は検出されていないが、事前に実施した試掘調査からは平安時代に時期比定される土師器片が出土している。調査成果と試掘調査の結果から、小河川や自然流路が流れる状況であったと推測されている。

中世では全ての調査において、遺構・遺物が発見されている。本調査地の東方にある余戸柳井田遺跡や西方に隣接する東垣生八反地遺跡からは、鎌倉時代から室町時代の水田址が発見されている。調査では2面ないし3面の水田面が確認されており、長期間にわたり水田經營が継続されていたことが分かる。

一方、余戸中ノ孝遺跡や余戸柳井田遺跡、東垣生八反地遺跡からは居住に関連する遺構が発見されている。検出した遺構は、掘立柱建物や溝のほかに土壙墓や井戸址である。東垣生八反地遺跡1次調査からは縦柱構造の大型建物址1棟が検出されており、集会所や祭祀場として利用された可能性がある。また、余戸柳井田遺跡3次調査からは小規模な建物址4棟が見つかっている。なお、同調査からは9基の柱穴内に柱材が残存していた。土壙墓は、3箇所でみつかっている。このうち、余戸中ノ孝遺跡1次調査では楕円形に巡る溝を伴った土壙墓が検出され、墓壙内からはほぼ完全な状態の人骨と副葬品（吉備系の土師器櫈）が出土した。なお、溝を伴った土壙墓の検出であるが松山市内はもとより、愛媛県内でも初例である。また、井戸址は6基みつかっており、いずれも曲物を井戸枠として使用していた。これらの遺構は出土遺物より鎌倉時代、13世紀後半頃の構築と考えられる。

調査結果から、以下のことが想定される。本調査地を含む周辺地域一帯は、平安時代後半になり部分的ではあるが地盤が安定し、人々は集落經營を開始する。鎌倉時代になり居住域と生産域とに土地の利用が分かれ、一部は水田經營に着手する。ところが、鎌倉時代の終わりから室町時代、14世紀代には居住域であった地域が生産域へと変化しているのである。これらの要因の一つには、時代の移り変わりと共に支配者層による土地利用・管理の変化によるものではないかと推測される。

さて、今回実施した東垣生八反地遺跡5次調査からは2面の水田址が検出されたが、第Ⅸ層上面にて検出した溝は水田耕作に伴う鋤址もしくは水路と考えられることから、本来は水田1・水田2とは別の水田址が存在したものと考えられる。この水田址は出土遺物や検出層位より、概ね鎌倉時代前半

頃まで存在したものと考えられる。検出した溝の方向性から、真北を指向した水田址と推測される。なお、第Ⅹ層上面からは6基の小穴を検出したが、溝より後出することから、水田址構築以降に掘削されたものと考えられる。

水田1・2以前に存在したと考えられる水田址は、第Ⅷ層の褐灰色土が堆積し、水田經營が終了する。この土層は調査地近隣にある余戸柳井田遺跡3次調査や東垣生八反地遺跡1次調査でも散見されており、本層中もしくは本層上面にて建物址や溝などが検出されている。おそらく、鎌倉時代後半、13世紀後半頃には何らかの理由で大規模な耕地整備が施されたのではないかと推測される。その結果、水田土壤は残存しておらず、跡地や水路の一部のみが検出されたものと推測される。第Ⅸ層堆積後には建物址や井戸などの集落經營が始まるが、鎌倉時代後半には再び水田經營が開始されることになる。

水田2は鎌倉時代後半以降に構築された水田址で、褐灰色土を水田土壤とする。水田2からは、足跡や根株痕を多数検出した。これらの遺構は全て洪水による砂で埋没しており、畦畔や水路等の施設は検出されなかった。その後、水田1が構築されることになる。

水田1は第Ⅳ層灰色土を水田土壤とし、水田2と同様、足跡や根株痕を検出した。これらは水田2と同様、洪水等による砂で埋没している。水田1と水田2からは水田を復元する資料は検出されなかつたものの、足跡の進行方向から、真北を指向した水田区画が存在したものと考えられる。出土品や検出状況から、水田1は鎌倉時代の終わり頃から室町時代にかけて存在した水田址と推測される。このほか、第Ⅹ層堆積以前の状況については、部分的な調査であり全容は定かではないが、第X層の状況から小河川や自然流路が流れているものと考えられる。

出土品では、水田層や包含層中より主に鎌倉時代の土師器や須恵器、瓦器の破片が出土した。なお、第Ⅸ層や第Ⅹ層中からは白磁碗や青磁碗、亀山焼の甕などのほかに木製品（箸）や種子（モモ）の出土がある。このほか、第Ⅸ層や第X層中より弥生時代終末期の土器片が出土したほか、第Ⅹ層中からは弥生時代に使用された粗製剝片刃器1点が出土している。これらの遺物は、調査地周辺に存在する弥生時代集落に関連する資料といえよう。

今回の調査を含め、既往の調査結果からも中世段階の水田址は数箇所の調査で検出されている。しかしながら、畦畔や水路等の施設は未検出であり、水田の形状や規模等は明らかになっておらず、課題を残す結果となっている。今後、周辺での調査によって、これらの課題を克服し、水田構造解明と時期特定が急務となる。また、今回は狭小範囲の調査であり、なおかつ周辺からの湧水が激しかったため、鎌倉時代以前、つまり第X層下の状況については発掘調査を実施することができなかった。外環状道路関連の調査では、標高1.5m前後の地点にて余戸中ノ孝遺跡や南吉田南代遺跡において弥生時代や古墳時代の集落遺構が発見されている。このことから、中世のみならず、弥生時代や古墳時代、さらには古代の様相を分析し、松山平野西部地域における遺跡の変遷や集落様相の解明も必要となろう。

写真図版



1. 調査前全景（北西より）



2. 調査地全景（南より）

図版
2



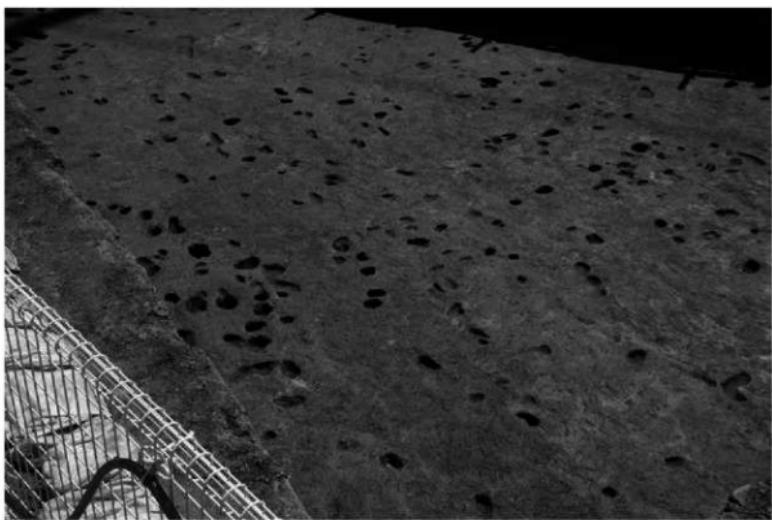
1. 水田1検出状況（南より）



2. 水田1足跡検出状況（南東より）



1. 水田 1 足跡完掘状況①（南より）



2. 水田 1 足跡完掘状況②（北東より）

図版
4



1. 水田 2 検出状況（南より）



2. 水田 2 足跡完掘状況①（南より）



1. 水田 2足跡完掘状況②（東より）



2. 溝・柱穴検出状況①（北より）

図版
6



1. 溝・柱穴検出状況②（東より）



2. 溝・柱穴完掘状況①（北より）

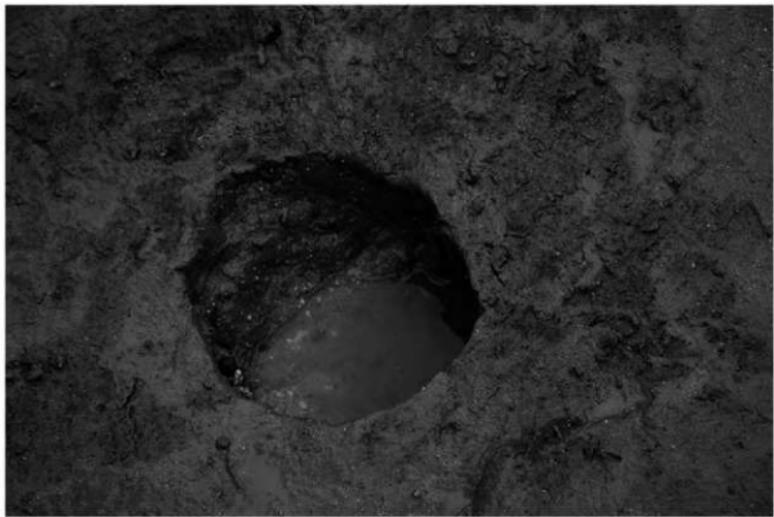


1. 溝・柱穴完掘状況②(東より)



2. 溝・柱穴完掘状況③(北より)

図版
8

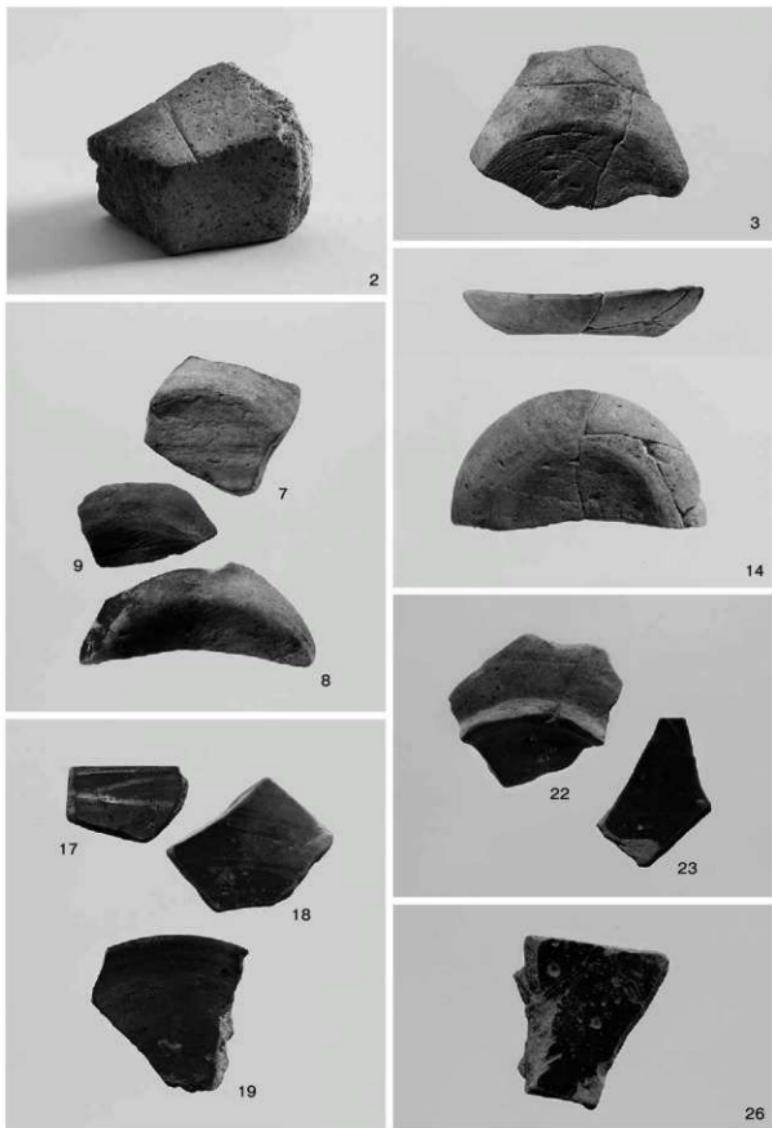


1. SP3 完掘状況（西より）



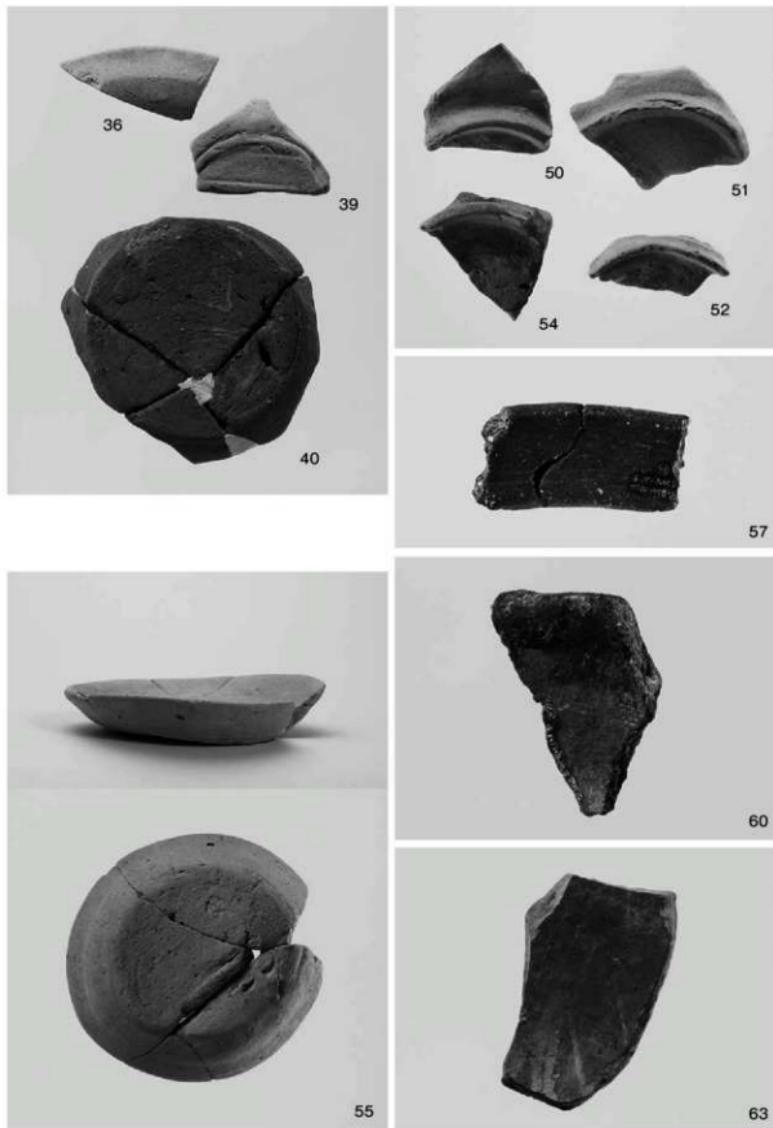
2. 作業風景（北西より）

図版
9

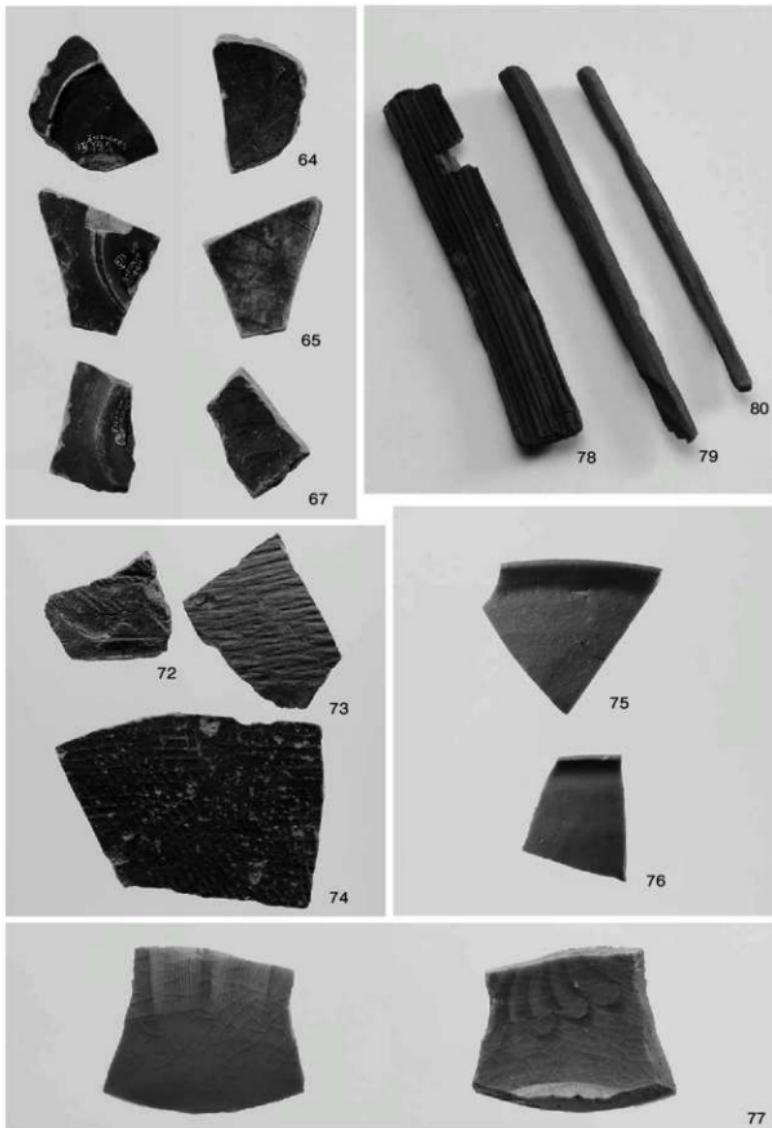


1. 出土遺物（水田 1・2、第VI層：3、水田 2：7・9・14・17～19、SD4：22・23、SD8：26）

図版
10

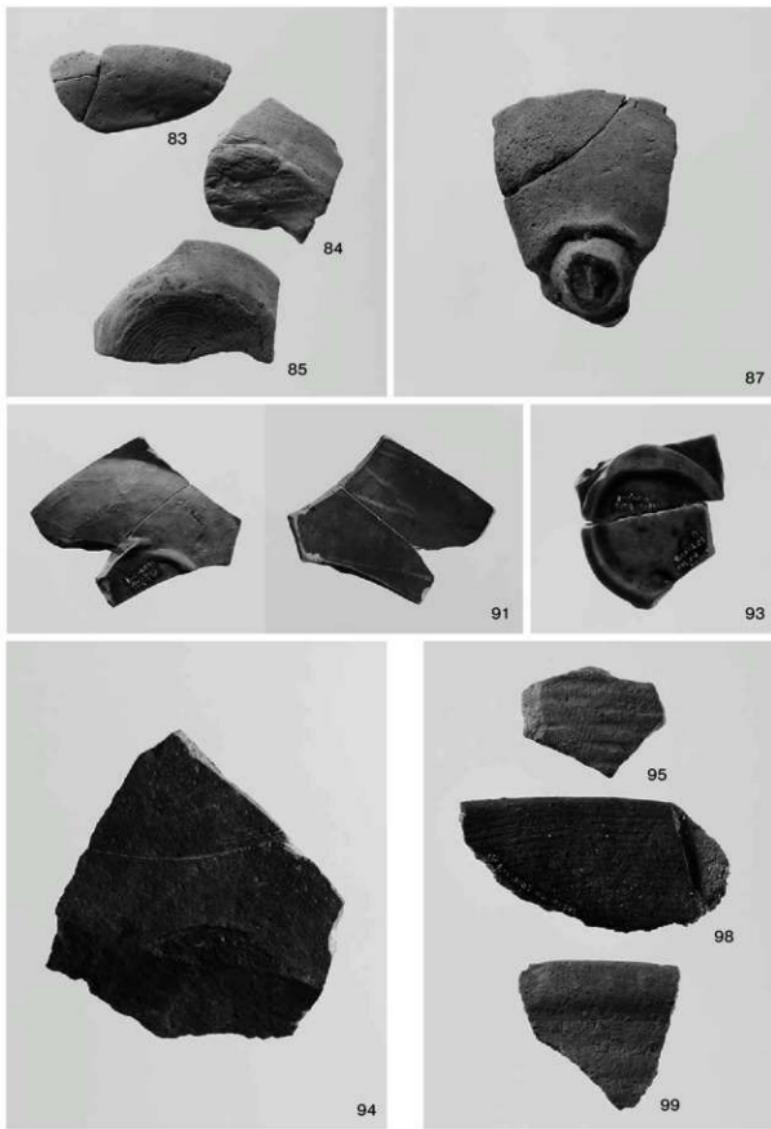


1. 第VII層出土遺物①



1. 第VII層出土遺物②

図版
12



1. 出土遺物（第IX層：83～85・87・91・93・94、第X層：95、地点不明：98・99）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ひがしはがはったんじいせき
書名	東垣生八反地遺跡－5次調査－
副書名	市道垣生 109 号線外 1 路線道路改良工事（その 2）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 198 集
編著者名	水本 完児
編集機関	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒 791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙 67 番地 6 TEL 089-923-6363
発行年月日	西暦 2020（令和 2）年 1 月 31 日

松山市文化財調査報告書 第198集
市道垣生109号線外1路線道路改良工事(その2)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

東垣生八反地遺跡

- 5次調査 -

令和2年1月31日 発行

編 集 公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團
発 行 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ 一
〒 791-8032 松山市南斎院町乙 67 番地 6
TEL (089) 923-6363

印 刷 株式会社明朗社
〒 791-2112 伊予郡砥部町重光 150 番地 1
TEL (089) 958-6868
